
アラベラ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラベラ

【Nコード】

N3512F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

フランツⅡヨーゼフ帝時代のウィーン。気品ある美女アラベラは運命の人が現われることを待っていた。その運命の人の名はマンドリカ。しかしその婚礼の前に誤解が生じ。リヒャルトⅡシュトラウスの楽劇を小説にしました。大人の女性を御覧下さい。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 ホテルの部屋にて

十九世紀中頃のオーストリアは一人の謹厳実直な皇帝により治められていた。

フランツ・ヨーゼフ帝。彼なくしてこの時代のオーストリア、そしてハプスブルク家を語ることはできないであろう。

弱冠十八歳で帝位に就いた彼は聡明かつ毅然とした態度を崩さない人物であった。生真面目であり執務が滞ることはなかった。美貌で名高い皇后エリザベートの存在でも知られているが彼はこの古い帝国の皇帝として存在していた。

その彼の下にオーストリアはあった。この時代に造られたギリシアの神々の像ではゼウスの顔は彼のものになっている。それが示すように彼はオーストリアの柱そのものであった。

その彼の下にある帝都ウィーン。この街は古くより音楽の都として知られている。

ハプスブルク家の宮殿シェーンブルンの鏡の間でまだ子供のモーツァルトがマリー・アントワネットにプロポーズをしたこともある。ベートーベンもこの街にいた。そしてハプスブルク家の君主達はその音楽を心から愛し育てた。そしてこの街から音楽が途絶えることはなかった。

この時代のウィーンは繁栄を極めていた。この巨大な帝国の心臓として栄え夜が訪れることはないようであった。人々は投機に沸き、華やかな舞踏会が日々繰り広げられていた。

だが光もあれば陰も必ずあるものである。

華やかな中にも黄昏にその身を沈めようとしている者達もいた。ウィーンの豪華なホテルの一室のことである。その日は懺悔の火曜日であった。

ホテルの豪華な一室で年老いた女がカードを切っている。

「さて、はじめますぞ」

「はい」

その向かいには初老の男女が座っている。どうやらこの二人は夫婦の様である。

男の方は立派な服を着た男である。八の字の口髭をワックスで固め頭はもう白くなり髪のももかなり薄くなっている。だが背はそれなりにあり姿勢もいい。堂々とした風格の持ち主であった。

女の方もいい服を着ていた。だが男とは違いやや老けて見える。髪は白いものがかなり混ざりそれがその老けた様子をさらに強いものにしていた。

老女はどうやら占い師の様である。黒っぽい服に身を包み頭にはフードを被っている。その手にあるカードはタロットであった。ジプシーのようである。

占い師はカードを机の上に一枚ずつ置いていった。所謂ケルト十字の並べ方である。

それから一枚一枚表に返していく。それを見る他の二人の顔が強張っていた。

「ふむ」

占い師はそれを見て呟いた。

「どうなのですか？」

向かいにいる二人はそれを受けて問うてきた。

「そうですね」

彼女は最後のカードを表にして、それを見てから顔を上げた。

「いいようですね」

「本当ですか!？」

「はい」

彼女は二人に対して答えた。ここで扉をノックする音がした。

「こんな時に」

女はそれを見て顔を顰めさせた。

「ズデンコ」

そして男の名を呼んだ。

「お母さん、何？」

するとすぐに小柄な少年が部屋に入って来た。

蜂蜜がかかったような金色の髪に透き通る様な青い瞳をしている。肌は白くまるで雪の様である。今は男の服を着ているが服さえ変えれば少女といっても通用する程であった。

「伝えて」

女はズデンコと呼んだ自分の子供に対して言った。

「父は留守、母は寝込んでいると。いいですね」

「わかりました」

ズデンコは頷くと扉に向かった。そしてほんの少しだけ開け応対をした。暫くして扉は閉められた。

「何だったの？」

女は問うた。

「請求書です、また」

ズデンコは暗い顔をして答えた。

「やっぱり」

彼女はそれを受けて深い溜息をついた。

「もう請求書で埋もれそうね」

「アデライーデ」

だがここで男が彼女の名を呼んで嗜めた。

「今は静かにな」

「わかったわ、貴方」

そう言つて夫であるヴェルトナー伯爵に頭を下げた。

実は彼は伯爵でありそれなりの身分にある。若い頃は騎兵隊に所属し太尉であった。だが軍を退役してからは泣かず飛ばずであり今は博打で生計を立てているという有様であった。無論それで生きていけるわけはなく今や破産の危機にあるのだ。

今彼等は未来を占ってもらっている。そうでないと不安で仕方がないのだ。

「心配はいりませんよ」

占い師は二人を宥めるようにして言った。

「幸福が近付いています」

「本当ですか!？」

二人はそれを聞いて身を乗り出した。

「御主人」

彼女はヴェルトナーに対して言った。

「貴方は先程大金を失われましたね」

「はい」

彼は無然としてそれを認めた。

「よく御存知で」

「はい。このカードが教えてくれました」

彼女は答えた。

「それはわかっていたわ」

アデライーデはそれを聞き首を横に振った。

第一幕その二

「けれどやっぱり」

「言わないでくれ」

ヴェルトナーは妻に申し訳なさそうに言った。

「わしの甲斐性がないばかりに」

「ですが御安心を」

占い師はまた二人を宥めた。

「一人の軍人が現れます」

そう言つて戦車のカードを見せた。

「軍人が」

「はい」

「それでは何もなりません」

アデライーデはそれを聞いて絶望しきつた顔で首を横に振つた。

「軍人が一体何の役に立ちましょう」

「軍人」

部屋の隅に行き書類の整理をしていたズデンコがそれを聞いて呟いた。

「マツテオのことかしら」

だがそれは二人には聞こえなかった。

「軍人はお金を持つてはいませんもの」

「わしもそうだったしな」

二人は溜息混じりにそう呟いた。

「そう思われるのは早いですぞ」

だが占い師はここでも二人を宥めた。

「それは彼の本質ではありません」

「違うのですか」

「はい。別の方角から他の者が来ています。それが花婿です」

そして皇帝のカードを見せた。

「皇帝」

「はい。その花婿は貴方達にとってまさしく皇帝そのものとなりましょう」

「本当ですか」

「カードはそう示しています。ただしそれは遠くからやって来ます。運命の輪のカードを見せた。」

「遠くからですか」

ヴェルトナーが問うた。

「はい」

占い師はそれに答えた。

「そこには大きな森が見えます」

隠者のカードが出て来た。

「森」

「それはエレメール伯爵かしら」

ウィーンでも名の知れた貴族である。裕福でかなりの領地を持っている。その中には見事な森もある。

「そこまではわかりませんが」

占い師はそれには言葉を濁した。

「少なくとも素晴らしい方であるのは事実です」

太陽のカードが出された。

「それはいい」

「素晴らしいわ」

二人はそれを聞いて顔を明るくさせた。

「しかし」

だが占い師はここで顔を暗くさせた。

「ただ一つ不吉な予感が」

吊るし人のカードが出て来た。

「幸福の前に一波乱ありそうですね」

「嫌ですわ」

「しかし御安心下さい。このカードは実はそれ程不吉なものではあ

りません」

「そうなのですか」

二人はタロットにはそれ程詳しくはないのである。

「ところで」

占い師はまた尋ねてきた。

「御二人の娘さんのことですが」

「はい」

見れば占い師は女帝のカードを取り出ししてきた。

「御一人なのでしょうが」

「え、ええ」

二人はその質問にギョツとしながらもそう答えた。

「そうなのですか」

占い師はその答えに首を傾げていた。

「実はカードが伝えているのですが」

「はい」

「もう一人の娘さんに危険が訪れようとしています」

そこでもう一枚女性を現わすカードが出て来た。女教皇のカードである。それはさかさまになっていた。

「タロットは少し違いました」

「はい」

彼女はここでカードの説明をした。

「カードが逆になっているとその示す意味も違ってくるのです」

「といいますと」

「これは不幸を示しているのです。もう一人の娘さんの」

「不幸を」

「けれど不思議ですね。こちらの方も最後には幸福になります」

「私のことなのかしら」

ズデンコはそれを聞いて何故か心配していた。

「それとも姉さんの」

「ねえお母さん」

気になったので母に話しかけようとした。だがアデライーデはそれを拒絶した。

「御免なさい、ズデンコ。今は静かにしていて」

「はい」

母にこう言われると仕方がなかった。彼女は下がることにした。

「あの子は？」

「あの実は」

アデライーデが占い師に対して説明をした。

「実はあの子は女の子なのです。このウィーンで二人の女の子を身分に相應しいように育てることは私達にはできませんので」

貧乏貴族の悲しさであった。

「けれどあの娘は悪いことはしませんわ」

「そうですね」

「はい。他の誰よりも姉を愛しておりますもの」

「姉だけだといいいのですが」

「それは？」

アデライーデだけでなくヴェルトナーもその言葉に顔を上げた。

「いえ、人の心は複雑なものですから」

占い師はカードを手にすることなく二人に対して語った。

「愛する人は一人とは限らないですよ」

「といいましても」

「あの娘はまだ幼い。とてもそこまでは」

「女の子とは何時の間にか成長するものですが」

占い師はその豊富な人生経験からそう語った。

「ですがそれは関係のない話ですね。置いておきましょう」

「はい」

こうしてこの話は中断された。そして占い師は占いを続けた。

「この波乱は大変なものようですね。そしてとても嫌なものですよ」

ここで塔のカードを出してきた。

「恐ろしいことが起こるようです」「

「そんな」

「けれど御安心下さい。最後には幸福が訪れるのは間違いないです。最後のカードを出してきた。それは恋人のカードであった。

「全ては幸せに収まります。神は貴方達に幸福をもたらすでしょう」「本当でしょうか」

「カードはそれを伝えております」

「あの」

ここでアデライーデが身を乗り出してきた。

「よろしければこれを」

そしてエメラルドのブローチを差し出した。

「これでもっと詳しく占って頂けるでしょうか」

「タロットは続けて同じことについて占いは出来ないのですが」

彼女はそう言って断ろうとした。幾ら何でもそのような高価なものを買うのは気が引けたからだ。

「ではそれ以外の占いで。おできになるのでしょうか？」

「ええ、まあ」

彼女は二人の押しに押されそれに頷いた。

「では願います、すぐに」

「わかりました」

「ではあちらに」

こうしてまた占うことが決まった。三人は別の部屋に移っていった。

「まだ占うのね」

ズデンコはそれを横目に見ながら呟いた。

「お父さんもお母さんも不安で仕方ないので、本当に」

それは痛い程よくわかる。彼女もそれで心を痛めているのだ。

「この街から離れたくない。あの人と離れ離れになるなんて」

彼女もまた何か事情があるようであった。

そこでまた扉を叩く音がした。

「また請求書かしら」

彼女は溜息をつきつつ扉に向かった。

「あの、今は」

帰ってもらおうように応対しようとした。だがそこにいたのは借金取りではなかった。

「ズデンコ」

そこにはオーストリアの軍服に身を包んだ若い男であった。長身でたくましい身体をしており、見事な金髪を後ろに撫で付けている。彫の深い顔に青い瞳が映える。見事な美男子であった。

「マツテオ」

ズデンコは彼を見て一瞬顔を明るくさせた。だがそれはあくまで一瞬のことであった。

「アラベラはいるかい」

彼は別の名を口にしたからだ。

「ううん」

彼女はそれに対して首を横に振った。

「姉さんならリングシュトラッセよ」

「リングシュトラッセか」

「ええ、女性の友達の方とお散歩しに」

「女の人とか。ならいいんだ」

彼はそれを聞いて少し安心したようであった。

「僕について何か言っていなかったかい？」

「いいえ」

「そうか」

ズデンコが首を横に振ったのを見て悲しそうに応えた。

第一幕その三

「昨日彼女はどうしていたのかな」

「お母さんと二人でオペラを観に」

「王立歌劇場か」

「ええ」

「残念だった。僕はその日当直だったんだ」

彼はオーストリア軍の将校であるのだ。

「残念だ。昨日もし自由だったら」

「けれど今日は大丈夫なんでしょう？」

「うん。けれど今日は昨日じゃないよ、残念ながら」

彼は嘆きながらそう言った。

「もう決して戻りはしないんだ、僕と彼女の仲も。いや」

彼は嘆きながら言葉を続けた。

「そんなものは最初からなかったのかも知れないな。僕が一方的に思い込んでいただけ」

「マツテオ……」

ズデンコは声をかけようとするが相応しい言葉を見つけることができなかった。だがそれでも言うしかなかった。ようやくその言葉を思いついて言った。

「大丈夫だよ、姉さんは君を愛しているよ」

「いつもそう言ってくれるけれど」

マツテオはそう言いながらズデンコを見た。

「姉さんに手紙を書いたんだろう？三日前に」

「うん」

マツテオはそれに答えた。

「じゃあ大丈夫だよ。気を確かに持って」

「けれど彼女はいつも僕に冷たい。あの時は返事の手紙だって来た」

「だったらいいじゃないか」

実はその手紙はズデンコが書いたものである。姉の筆跡を真似て書いたのだ。

「しかし態度は変わらないんだ。これはどうということだい？」

「それは」

ズデンコは返答に詰まった。真実を言うことはできなかった。

「女ってそういうものだよ。気持ちとは裏腹に態度は意地が悪くなるものなんだ」

「そういうものだろうか」

マツテオにはそれが理解できなかった。

「僕にはとてもそうは思えないんだけれど」

「それは君がまだそうしたこと慣れていないからだよ」

ズデンコはそう言って彼を宥めた。

「それに姉さんはとても恥ずかしがり屋なんだ。口に出して言うなんてとても」

「君はいつもそう言ってくれるけれどね」

マツテオは悲しい目をして彼女に言った。だが彼は目の前にいる小柄な少年が実は少女であるとは夢にも思っていない。

「けれど本当なのかい？君が僕のことを心から心配してくれているのはいつも感じているよ。本当に有り難い。けれど」

「けれど……」

「彼女が僕を愛してくれているというのは信じられないんだ。君が僕を安心させようとして言っているんじゃないのかい？」

「違うよ」

ズデンコはそれに対して首を横に振った。

「どうしてそんなことを思うんだい？僕を信じられないの？」

「いや」

覗き込む彼の目を見てマツテオはそれを否定した。この時彼は気付かなかった。その目が友を気遣うものではないということに。

「けれどももう疲れたんだ。今日のうちにはつきりさせたい」

「今日のうちに」

「そうなんだ。今日は懺悔の火曜日。大きなパーティーがあちこちで開かれるね」

「うん」

「そこでは愛の告白もある。全てを決めるには相応しいだろう？」

「言われてみればそうだけれど」

ズデンコはここで彼の瞳に不吉なものを感じていた。

「君を信用するよ、何があっても」

「何があっても？」

「ああ、だから言うよ。今日もし駄目だったら諦める。明日人事部にガリチアに転任させてもらうよう申し出るよ。丁度士官に一人欠員があるんだ」

「そうなの」

「そこで彼女のことを完全に忘れる。けれど」

「けれど？」

ズデンコは問うた。

「それで駄目だったら……ピストルしかない」

彼は俯いて暗い顔でそう言った。小さい声だった。

「それで全てが終わるからね」

「マツテオ、そんなことは」

「もう決めたんだ」

彼は悲しい顔で微笑んでそう言った。

「君には本当に感謝しているよ。けれど僕は自分の気持ちを否定することはできない。だからそう決めたんだ」

「変える気はないんだね」

「残念だけれどね。だから……頼むよ」

「うん」

ズデンコはそれに頷いた。頷くしかなかった。

「じゃあね。今日は非番だけれど何かと準備があるからこれで」

「ええ」

「アラベラのこと、よろしく頼むよ」

そして彼はそこから立ち去った。後にはズデンコだけが残った。

「どうしたらいいのかしら」

彼女は一人途方に暮れていた。

「彼に会いの言葉を贈ることも姉さんの筆跡を真似て手紙を書くこともできるのに。けれど彼自身に私が言うことはできはしないのね。何て残酷な話なの？」

彼女は椅子に座り嘆いていた。

「そして彼は私のことに気付いていない。私を男だと思い込んでいる。そんな私がどうして彼に言えるのかしら」

マツテオは人を疑うことを知らない純朴な男である。軍にいるせいかそうしたことには疎いのだ。

「私が手紙を贈ってもももうどうにもならない。彼はきつと死を選ぶわ。あの人ならきつとそうする」

結果はわかっていた。マツテオの性格は何から何まで全てわかっていた。

「姉さんは彼を愛してはいない。けれど彼は姉さんを愛している。それはどうにもならない。そして私も……」

解決する方法は見出せなかった。彼女は一人途方に暮れていた。

そこで扉が開いた。

「御苦労様」

高く澄んで清らかな声が部屋に入ってきた。

「明日また同じ時間にお願いますね」

そして一人の美しい娘が中に入ってきた。

長い金髪を背中に垂らしている。それはまるで金の絹の様に広がっている。そして白いまるで雪の様なドレスを包んでいた。その肌もまた雪の様であった。白く汚れない白であった。

顔もまた同じ色である。高い鼻に小さく紅の色をした唇がある。

目は大きかった。それは澄んだ湖の色をしておりその中に星の瞬きが見えた。

そして非常に背が高かった。普通の男性と同じ位はあるのか。そして姿勢もよく均整のとれたギリシア彫刻の様な身体とよく合っていた。

「あら、ズデンカ」

彼女は机の上に頭を抱えている少女に声をかけた。

「一体どうしたの？」

「姉さん」

ズデンコ、いやズデンカは顔を上げた。実は彼女の本名はズデンカというのだ。男ということになっている為この名を使うしかないのだ。

そしてこの美しい女性こそアラベラであった。言うまでもなく彼女の姉である。

「そんなに思い悩んで」

「何でもないわ」

彼女は無理をして笑った。

第一幕その四

「そう、それならいいけれど」

彼女はそう言いながらも妹を心配そうな目で見ていた。

「一人で悩まないでね。私が相談に乗るから」

「うん」

しかしそれはできなかつた。他ならぬ彼女のことであるからだ。

「あら」

アラベラはここで花瓶の花に気付いた。

「綺麗な薔薇ね」

見れば真紅の薔薇が花瓶の中にあつた。

「一体誰が持つて来てくれたの？いつものハンガリー騎兵の人？」

彼女はハンガリー騎兵の将校にも愛を告白されているのだ。

「ううん」

だがズデンカはそれに対して首を横に振つた。

「マツテオからよ」

実は彼女自身が持つて来た花だ。だがそれは言わない。

「そう」

アラベラはそれを聞いて少し溜息を漏らした。

「気持ちには有り難いけれど」

「やっぱり駄目？」

「ええ」

アラベラは少し残念そうな顔をして答えた。

「ところでは？」

アラベラは離れた場所にある花束に目を向けた。

「エレメールさんからのよ」

「そう」

「そしてドミニクさんの香水にラモールさんからのレースも。皆さん今日も姉さんに御執心よ」

「そうなの。皆さん気持ちは有り難いけれどね
あまり嬉しくはないようである。」

「気持ちを受け入れる気にはなれないの？」

「ええ。申し訳ないけれど」

「マツテオも？」

「ええ。わかるでしょう？私とあの人は合わないわ、残念だけれど
「そう」

ズデンカはそれを聞いて悲しそうな顔をした。

「愛してはいないのね」

「ええ」

アラベラは答えた。

「私はそれを偽ることはできないわ。自分の気持ちも。そしてそれ
はあの人自身にも悪いわ」

「そういうものなの」

「私はそう思うわ。貴女はどうかわからないけれど」

「そうなの。マツテオの気持ちはわかっているでしょう？」

「それでも駄目なの。結ばれたとしてもお互いが不幸になってしま
うわ。私達だと」

彼女にはそれがわかっていた。だからこそそう言えるのである。

「あの人を傷つけるわけにはいかないわ」

「そうなの」

「少なくとも私はそう思うわ」

アラベラは自分の心を素直に語った。

「マツテオは本当にいい人よ。あの人と一緒になれた人は必ず幸せ
になれるわ」

「それなら」

「けれどね」

アラベラはここでズデンカに対して言った。

「それでも駄目なのよ。わかるかしら」

「いえ」

ズデンカはそれに首を横に振った。

「私には贅沢を言っているようにしか思えないわ」

「そうでしょうね。確かに私は贅沢を言っているかも知れない。けれどね」

彼女はまた言った。

「それでも私とあの人は合わないわ。何ていうかそうした運命なの」

「運命って……。。じゃあマツテオは姉さんとは結ばれない運命なの!？」

「そういうことになるわね」

「そんな……。。」

ズデンカはそれを聞いて絶望した顔になった。

「私には私が正しいか、貴女が正しいかはわからないわ。けれどこれだけは言いたい」

「何？」

「私が本当に好きになれる人はこの世には絶対にいるわ。そしてその人にめぐり合える時はもうすぐよ」

「何でそれがわかるの？」

「勘かしら。心の中で何かが私に教えてくれているのよ」

「そんな筈ないわ。気のせいよ」

「そうかも知れないわね」

アラベラはまた言った。

「けれど私は信じるわ。私に訴えてくるこの中の声を」

「そうなの」

「ええ。ところで御父様と御母様は？今日はまだ外出されていない筈だけれど」

「奥の部屋よ。今占ってもらってるの」

「そう」

「そこで姉さんのことも占ってもらってるわ。幸せになれるかどうか」

「幸せにね。それもそうね」

彼女はここで優しく微笑んだ。

「娘の幸福を願わない親なんていないから」

「姉さんにはね。けれど私には」

「ズデンカ」

アラベラは悲しそうな顔をする妹に対して言った。

「そんな筈ないわ。御父様も御母様も貴女の幸せも願っておられるわ」

「そうかしら」

「少なくとも私は。だって私のたった一人の妹なんですもの」

「姉さん……」

ズデンカは姉の暖かい言葉に目に熱いものを感じた。ここで外から何か聞こえてきた。

「あれは」

「鈴の音かしら」

二人は窓から下を見た。見れば櫓が一両止まっていた。

「何かしら」

「そういえば今朝私が外出しようとした時だけれど」

アラベラは語りはじめた。

「見知らぬ人が立っていたわ」

「どんな人？」

ズデンカはそれを気になって尋ねた。

「大きな人だったわね。旅行用の毛皮の外套を着てたわ」

「旅の方かしら」

「多分ね。あそこの門に立っていたの」

そう言いながら門を指差す。

「御供に騎兵の人を従えて」

「身分のある方なのかしら」

「少なくとも卑しい方だとは思わなかったわ」

「そうよね。御供の人まで従えているんだから」

「大きな目をしておられたわ。黒くて大きな目だったわ」

「黒い目。イタリアからの方かしら」

「そうともばかり限らないわよ。ほら、目の黒い方だって大勢おられるじゃない」

「あ、そうだったわね」

オーストリアは多民族国家である。そしてこのウィーンは大国オーストリアの首都である。それだけに多くの人々が街を行き交っているのだ。だから様々な髪、様々な目の色の人々がいるのだ。

「一体誰なのかしら」

「今の櫓に乗っておられた方かしら」

既に櫓の中の者はホテルに入っていた。残念ながら見ることはできない。

「こちらに来られたら面白いのにね」

「姉さんに会いに？」

「そこまではわからないけれど」

アラベラはクスツと微笑みながら窓から離れた。

「ところでズデンカ」

彼女はここで妹に対して語りかけた。

「何なの、今度は」

アラベラはそれにはすぐ答えず花瓶の紅い薔薇を一つ手にとった。

「これを貴女に」

そしてその薔薇を彼女の服の胸の部分に差し込んだ。

「貴女に幸福がありますように」

それはまさに胸に咲いた一輪の花であった。

「姉さん、いいの？」

ズデンカはそれを受けて姉に尋ねた。

「こんな綺麗な薔薇」

「いいのよ。私は受け取ることはできあにけれど貴女には受け取ることが出来るわ」

「私には」

「ええ」

彼女は妹の気持ちに気付いていた。だがそれは決して口には出さなかつた。そしてそれを妹には気付かせなかつた。

ここで扉を叩く音がした。

「はい」

ズデンカが出た。扉を開けると中から背の高い軽やかな外見の貴公子が姿を現わした。

第一幕その五

「エレメール伯爵」

「どうも」

エレメールはここで優雅に頭を下げた。

「フロイライン、本日は私の番でしたね」

「はい」

アラベラはそれに応えた。

「本日は櫛にロシアの馬を繋げて参上致しました」

「それでは下の櫛は貴方のでしょうか」

「はい、その通りです」

彼は快く答えた。アラベラはそれを受けて内心少しがつかりした。

「今宵は私が貴女をお送り致しましょう。あの白銀の馬車で」

「雪の中をですね」

「そうです。雪の中に銀は映えますぞ」

「それはそうですが」

だがアラベラは今一つ面白くなさそうな顔をしている。だがエレメールはそれに構わずやや自慢げに語り続ける。

「そして舞踏会で貴女は私の主となるのです」

「そうやら自分の言葉に酔っているようである。」

「私が貴方の」

「はい。このエレメール、喜んで御仕え致しますよう」

そしてアラベラの前に行き片膝をついた。恭しく頭を垂れる。

「騎士としての忠誠を捧げましょう」

「御気持ちは有り難いですが」

だがアラベラの態度は変わらなかった。

「後の御二人が何と言われるかしら」

彼女に求婚しているのは彼だけではなかった。他にもいるのである。

「ドミニク伯爵とラモール伯爵ですね」

「はい」

「それは御心配なく。私達は誰が選ばれようとも互いに恨むことやないと誓いを立てておりますから」

「そこまでなさらなくとも」

「いえ」

だがエレメールはここで首を横に振った。

「これは騎士としてのけじめです」

毅然として言った。

「武勲を立てるのこそ騎士ですがそれを妬まない、違いますか」

「では私は武勲なのですね」

アラベラはそれを聞いて整った顔を顰めさせた。

「そうですね。貴女は御自身から武勲になられたのです」

エレメールは胸を張って彼女に言った。

「貴女はその目で私達にそうするように要求されました。その青い瞳で」

「そうですね。覚えがありませんが」

「貴女は知らず知らずのうちにそうされました。それ程までに女性の瞳は強い」

彼は言葉を続ける。

「与え、そして取り上げる。尚且つそれ以上のものを要求します」

「私がそれ程欲が深いと」

「いえ、それは違います」

エレメールはそれを否定した。

「私達にそうさせるのです。その青い瞳の魔力で」

「大袈裟ですね」

アラベラはそれを聞いて苦笑せずにはいらなかった。

「まるで私を魔女の様に」

「ええ、その通りです」

エレメールはそれを受けて言った。

「女性とは皆そうです。とりわけ貴女は」

「私ははじめて知りました」

アラベラは苦笑したままであった。

「私が魔女だったなんて」

そしてエレメールに対して語るように言った。

「私は私ですわ。今は娘時代へ最後の別れをする時。けれど私は私です」

「そう、貴女は貴女御自身に他なりません」

エレメールもそれには同意であった。

「ですがその中でも変わっていかれるのです。花が咲く様に」

「花、ですか」

「はい」

エレメールはそれに頷いた。

「そして私の手の中で咲くのです。大輪の花が。フロイライン」

その言葉は次第に熱を帯びてきた。

「躊躇われることはありません。あの櫓に乗りましょう。そして幸福へ向かいに」

「あのロシアの馬が引く櫓に」

「はい」

「では行きましょう。謝肉祭を祝いに。ただ」

「ただ？」

エレメールはここで風向きが変わったことに内心危惧を覚えていた。

「ズデンコも一緒に」

「弟さんもですか」

「はい」

真相は伏せた。

「半時間後で弟と一緒に下に向かいますわ」

「フロイライン」

エレメールはそれを聞いて悲しい顔にならざるを得なかった。

「貴女は残酷な方だ。ここまで来て尚も騎士を側に置くとは」
「言わないで下さい」

アラベラは目を伏せ、顔を逸らして答えた。

「私には弟が側に必要なのです。それをおわかり下さい」

「………わかりました」

エレメールは無念さを心の中に押し殺して言った。

「ではお待ちしております」

「はい」

アラベラの声は普段とは変わらない。だがエレメールにはこの上なく冷たい言葉に聞こえた。

エレメールは頭を垂れた。そして哀しそうな顔でアラベラに対して言った。

「フロイライン」

その声も同じであった。

「貴女は素晴らしい女性です。崇拜に足る方です」

アラベラはそれには答えない。ただ目を伏せている。

「ですがあまりにも残酷な方だ。だがその残酷さにすらこの上ない魅力がある」

そして最後に言った。

「だからこそ私は貴女に想いを寄せる。それはおわかり下さい」

その言葉を最後に部屋を後にした。すると席を外していたズデンカが部屋に入ってきて来た。

「伯爵は帰られたのね」

「ええ」

アラベラはそれに応えた。

「下で待っておられるわ。半時間したら下に行かないと」

「そうなの」

「ズデンカ、貴女も一緒よ」

「私も!？」

「そうよ。すぐに用意して。言ったでしょ、小さい時に」

アラベラは妹に対して微笑んで言った。

「私達は何時でも一緒だって。そして私は何時でも貴女の味方だつて」

「うん」

ズデンカはそれに頷いた。その言葉は忘れたことはなかった。幼い頃姉にふと言われた言葉だったが。

それでも二人はその言葉を今でも覚えていた。そしてその言葉通り二人は何時でも一緒だったのだ。

「だから……ね。一緒に行きましょう。それに今夜は私の娘時代へのお別れの日」

「謝肉祭の最後の夜」

「そうよ。その時には相應しいでしょう？そして貴女も」

「何？」

「いえ、何でもないわ。それより見て」

アラベラは窓の側に向かった。そして妹をそこに招き寄せる。

第一幕その六

「あの馬を」

「馬？」

「そうよ、ロシアの馬よ。貴女はあの馬に引かれて宴に向かうのよ」
「どんな馬かしら」

ズデンカは窓に歩いてきた。アラベラはそれを見て微笑んでいる。
「ほら、あれよ。あの……」

ズデンカに馬を見せようとする。だがここでアラベラはアッと声をあげた。

「どうしたの、姉さん」

「嘘……」

姉は我を失っていた。普段の落ち着いた様子はなかった。

「そんな顔して」

「あの人がいたのよ」

「あの人？」

「そうよ。さつき話したでしょ。あの人よ」

「ああ、外套を着た人ね。その人がどうしたの？」

「今下にいるのよ」

「本当!？」

ズデンカはそれを聞いて窓の下を覗き込んだ。確かにそこには誰かがいた。見れば外套に帽子を身に着けている。その為顔はよくわからなかった。

「あの帽子と外套を身に着けた人なの？」

「ええ」

アラベラはそれに頷いた。

「間違いないわ、ほら見て」

アラベラはその男を指差してズデンカに対して言う。

「上を見上げてらっしゃるわ。きっと私のことを探しておられるの

よ。あの大きな瞳で」

「そうかしら」

だがズデンカはそれには懐疑的であった。

「私にはそうは見えないけれど」

そう言つて姉を嗜めた。

「姉さん、少し落ち着いた方がいいわ。あの人は誰も探していないわよ」

「そうかしら」

「ええ。ほら見て」

そしてそ男を指差した。

「通り過ぎて行くみたいよ。やっぱり姉さんの考え過ぎよ」

「そうなの」

アラベラはそれを聞いて残念そうに溜息をついた。

「けれどまさか」

「姉さん」

ズデンカはそんな姉に対して忠告しようとした。だがここで二人の両親が姿を現わした。

「二人共」

「はい」

二人はそれを受けて顔を向けた。

「ちよつと大事なお話があるの。悪いけれど席を外して」

「わかりました」

何の話をするのかは大体わかつている。二人はそれに従った。

「じゃあズデンカ、準備に取り掛かりましょう」

「ええ」

そして二人はそれぞれの部屋に入った。両親は後から出て来た占い師を送ると席に着いた。ヴェルトナーはその前に書斎の机の前に向かった。

「やれやれ。相変わらず請求書の山だよ」

彼は溜息をつかずにいられなかった。

「他には何もないな」

「連隊の御友達にお出しになった手紙は？」

「残念だが」

ヴェルトナーは妻に対して首を横に振って答えた。

「何もないな。マンドリーカにも送ったが」

「マンドリーカ？何方ですか？」

「ああ。凄い大金持ちでな。ある女性の為にヴェローナの街路に三千シエツフェルの塩を撒かせる程のな。その女性が八月なのに櫂に乗りたいたったので」

「それは凄いですわね」

「そう思うだろう。だから私はアラベラの写真を一枚彼の手紙に入れておいた。白鳥の羽飾りのついた青い舞踏服のものをだ。それであの娘を気に入ってくれるようにな」

「ではアラベラは老人と結ばれるのですか！？」

アデライーデはそれを聞いて暗い顔で問うた。

「そうなるな」

ヴェルトナーも暗い顔で返した。

「だが他に解決する道はないんだ」

「他に、ですか」

「ああ、ウィーンに留まる為にはな」

「何てこと。そこまでしてこの街にいたくはないわ」

彼女は嘆いた。目を閉じ首を横に振る。

「ではどうする？」

「ここを出ましよう、そしてヤドウィの伯母さんのところへ行きましよう」

「以前言っていたようにか」

「ええ。そして貴方はそこで家の管理人になって私は伯母さんのお手伝いに」

「伯爵夫人ともあろう者が」

「けれどそうするしかないわ、こうなっては」

「アラベラとズデンカはどうなるんだ？」

「ズデンカはずっと男の子のまま。仕方ないでしょう」

「そうか。気の毒だな」

「私だつてそう思うわ。けれどそれしかないでしょう」

「ああ。認めたくはないが」

彼は苦虫を噛み潰した顔で頷いた。

「アラベラは？」

そしてその顔のままアラベラのことを問うた。

「さっきの占いでは悪い結果ではないが」

「ええ。けれどももう私達には何もないので。本当に何もないので」

「エメラルドのブローチもあの占い師に渡してしまった」

「そうよ。あれが最後だったわ。これで本当に全てがなくなったわ」

「そうだな。全てが終わったか。諦めるしかない」

二人は苦渋に満ちた顔で同じく苦渋に満ちた声を吐き出した。

「だが今は落ち着こう。酒にしよう」

「はい」

二人は顔を上げた。そしてヴェルトナーがベルを鳴らした。

「何でしょうか」

すぐに立派な制服を来たボーイが姿を現わした。

「コニヤックをくれ。いつものを」

「申し訳ありませんが」

ボーイはそれに対して畏まって答えた。

「お客様には何も差し上げてはならないことになっております。現

金ならば別ですが」

「そうか」

わかつていた。支払いが滞っているからだ。ヴェルトナーはそれを聞いて再び苦渋の顔に戻った。

「じゃあいい。用はない」

「わかりました」

ボーイは頭を下げて部屋を後にした。二人は閉じられた扉を見て

溜息をついた。

「本当に終わったな、もう何もかも手詰まりだ」

「ええ。やっぱりこの街を去るしかないわね」

「ああ」

その時だった。先程のボーイがまた入って来た。

「お客様」

「何だ！？呼んでないぞ」

「お客様が来られています」

「わし等ではなくてか」

「はい。男の方です」

「いないと言ってくれ。請求書ならあそこに置いてくれ」

そう言いながら書斎の机を指差す。かなり投げやりな様子だ。

「いえ、請求書ではありません」

「？では何だ」

「こちらです」

彼は手に持っていた書類をヴェルトナーに手渡した。

「名刺か。またえらくいい紙を使っているな」

彼はその名刺を手にしながら呟いた。

「何と・・・・・・・・」

そしてその名刺にある名を見て思わず声をあげた。

「貴方、どうしたの!?!」

アデライーデは夫のその唯ならぬ様子を見て気になって尋ねた。

第一幕その七

「マンドリーカだ」

「さつき仰つてた」

「ああ、間違いない。まさか本当に来るとは」

驚きを顔に浮かべたままボーイに顔を向けた。

「その客人は私に会いたいのか」

「はい、どうしてもお会いしたいと仰っていました」

「そうか」

事務的なその返答を聞いて彼は考えた。

「わかった。お通ししてくれ」

「はい」

ボーイは頭を垂れると部屋を後にした。そして暫くして戻つて来た。

「こちらです」

「おお」

ヴェルトナーは立ち上がった。そしてボーイに案内され部屋に入つて来た男に声をかけた。

「よく来てくれた、久し振りだな」

彼はあえて喜ばしい声でその男に声をかけた。

「元気だったか。ウィーンは何年ぶりかね」

「はじめてです」

「そうか、はじめてか……何!？」

ヴェルトナーはそれを聞いて思わず顔を前にやった。

「おい、それは嘘だろう。一緒にこの街の大通りを行進したじゃないか。馬を並べて」

「確かに叔父は騎兵隊におりましたが」

部屋に入つて来た男は答えた。

「私は騎兵隊にいたことはありませんが」

見ればヴェルトナーよりも遙かに若い。二十代後半か三十代前半と思われる若い男であった。

長身で遅しい身体つきをしている。黒い髪を後ろに少し撫でつけている。見ればかなり質のいい油を使っている。

顔立ちはいささか田舎っぽさもあるが整っており気品が漂っていた。綺麗に切り揃えた口髭がその顔によく合っている。黒い瞳の光は落ち着いており優しささえ漂っていた。そして黒いコートの下に見事なスーツを着ている。それだけで彼がかなり裕福な男であるとわかった。

「何、では君は一体」

「私はマンドリーカ騎兵隊退役大尉の甥です」

「甥だったのか」

「はい。ヴェルトナー伯爵はおられるでしょうか」

「私ですが」

彼は答えた。

「一体何の御用でしょうか」

「はい、実はこの手紙ですが」

彼はそこで後ろに控える騎兵隊の服を着た従者に目配せした。するとその従者は懐から一枚の手紙を取り出した。

「御苦労」

彼はそれを受け取った。そしてそれをヴェルトナーに見せた。

「これを私に送って下さったのは貴方でしょうか」

「うづむ」

手紙を見る。何故か赤く汚れているが読める。確かに彼の字だ。

「はい、間違いありません」

「そうですか、それはよかったです」

彼はそれを受けてにこやかに笑った。

「ここ暫くこの手紙のことばかり考えていたもので。本来ならもっと早くこのウィーンに来たかったのですが」

彼はここで少し哀しい顔になった。

「この手紙を受け取ったその日に熊に襲われまして。そして暫く動けなかったのです」

「熊にですか」

「はい。私の住んでいる場所は森の奥深くです。このウィーンとは比べ物にならない程の田舎です」

「ふうむ、それは大変でしたな」

「まあよくあることですよ。私はその熊を何とか倒しましたが」

「いやはや、それはそれは。ところで」

「はい」

彼はヴェルトナーの問いに顔を向けた。

「貴方は私の旧友であつたあのマンドリーカ大尉の甥と今仰いましてが」

「はい」

彼はそれを認めた。

「それが何か」

「いえ、私は彼に手紙を送りましたので。彼はどうしたのですか？」

「叔父ですか」

「はい」

「亡くなりました」

彼は俯いてそれに答えた。

「そうだったのですか」

それは考えなかつた。ヴェルトナーは友の死を聞き唇を噛んだ。

「いい男でした。友人としても軍人としても」

「有り難うございます。叔父も天国で喜んでいることでしょうか」

彼はそれを受けて言った。

「そして今では私がマンドリーカ家のたった一人の者です。叔父は私に自分の全てを残してくれました」

「そうですね」

「それで手紙を開いたことはお許し下さい」

「はい」

「それでお聞きしたいのですが」

彼はまた従者に目配せした。

「あの写真を」

「はい」

従者はそれを受けて一枚の写真を取り出した。それはヴェルトナーが手紙に添えたあの写真であつた。

「この写真は貴方の娘さんで間違いありませんか？」

「はい。私の娘に間違いありませんが」

彼はそれに答えた。

「アラベラと申します。手紙にも書いてありましたが」

「そうですか」

マンドリーカはそれを聞いて頷いた。

「この手紙によるとお一人だそうですが」

「はお」

ヴェルトナーはそれを認めた。

「婚約もしておりませんが」

「お手紙の通りですね」

彼はそれを聞きまた頷いた。

「それでは少しお話したいことがあるのですが」

「そうですか。それなら立ち話も何ですから」

ヴェルトナーはそれを受けて後ろにいた妻に目配せをした。

「少し席を外してくれ」

「はい」

彼女はそれに従いその場から立ち去つた。

「御前も少し休んでいてくれ」

マンドリーカも後ろにいる従者にそう伝えた。彼はそれに頷き下がった。

二人はテーブルについた。そして話をはじめた。

「でははじめますか」

「はい」

マンドリーカはそれに了承した。そして話がはじまった。

「あの手紙の内容についてですが」

話は手紙のことであった。これはヴェルトナーもおおよそ見当がついていた。

「はい」

気構えはできていた。それを受けて顔を向けた。

「娘さんの婚約者を探しておられるようですが」

「はい」

その通りであった。彼はそれを認めた。

「ですがそれは私の叔父に対してだったのですか？御言葉ですが叔父は」

「それはわかっています。彼が人生の黄昏時にいることは」

彼はそれに対して答えた。

「私も同じですから」

「それなら何故叔父に」

「いや、それは」

真相を言うことはできなかった。彼は誤魔化すことにした。

「ほんの冗談です。友人として」

「伯爵」

だがマンドリーカはそれを受けて厳しい顔をした。

「叔父は死ぬその直前まで元気でした。おそらくあの写真を見たらすぐにここへ来たでしょう。独身でしたし」

「はい」

「ですが叔父は生真面目でした。これも御存知だと思われませんが」

「勿論です」

それはヴェルトナーもよくわかっていた。

「では冗談を好まなかったことはご承知でしょう。そして私は貴方がその様な冗談をされる方とは思えません」

彼は言った。

「今は私がマンドリーカ家の主です。多くの者が私の幸福を祈って

「くれております」

彼にはそれだけの部下や使用人がいるということである。

「その数は四千人」

「そんなにですか」

それはヴェルトナーも知らなかった。富豪だとは聞いていたが。

「はい。そして貴方のお手紙のことですが」

彼の顔はさらに真剣なものになった。

「言わせて頂きます。もう叔父はおりませんが」

「はい」

「お嬢さんを私の妻に。あの人を私にお与え下さい」

強い声でそう言った。

「それは……」

予想していたとはいえその言葉に戸惑わずにはいらなかった。

それは親として当然のことであった。

第一幕その八

「宜しいでしょうか」

「マンドリーカは不安そうな顔で問うてきた。」

「ううむ」

「伯爵。あのお手紙のこと、偽りではないでしょう」

「はい。私も軍人でした。嘘は申しません」

「有り難い。それならば」

「マンドリーカはそれを聞いて顔を綻ばさせた。」

「先程のお話の続きをさせて頂きます」

「あの熊に襲われたお話ですか」

「はい。あの時私は肋骨を折りました。四本も」

「それは大変でしたな」

「命に別状はありませんでしたが。ですが三ヶ月程病床に横たわることになりました」

「彼はその時のことを思い出しながらヴェルトナーに対して語った。」

「その間この写真と手紙をずっと見ておりました」

「そして手紙とアラベラの写真を見せた。」

「見る度に私の思いは募りました。お嬢さんへの思いが」

「彼の言葉には次第に熱がこもってきた。」

「厩舎の者達も農場の者達も森番達もそんな私を心配しました。私はそれを見て言ったのです。恋をしていると。そう、貴方の娘さんに」

「アラベラに」

「そうです。そして私は病床から起き上がれるようになると執事を呼びました。森を欲しがっていたユダヤ人にあの櫨の木を売るように」

「森をですか」

「はい。この街には息をするだけで金が落ちると聞いております。」

それならば多くの金がいると考えまして」

「それだけでその森を売られたのですか」

これにはヴェルトナーも驚かずにはいられなかった。

「はい、求婚の旅に邪魔があつてはなりませんから」

彼はそう言いながら懐から財布を取り出した。

「これがその森です」

見ればその中には紙幣が束となり詰まっていた。実に重そうである。

「美しい森でした。隠者もジプシー達もいました。獣達が棲み、多くの薪や炭が手に入りました。私のお気に入りの森の一つでした」

「それを売られたのですか」

「はい、全てはお嬢さんにお会いする為です」

彼は熱い声で語った。

「その為に、ですか」

「はい。惜しくはありません。私には森はまだ多くありますし他の財産もあります」

「しかし」

「構いませんよ。そうだ」

彼はここでふと気がついた。

「貴方も今必要なのではないですか？お金が」

「うっ……」

彼はその言葉にギクリ、とした。その為にマンドリーカに手紙を送ったのだから当然であつた。

「必要ならば如何でしょうか」

「はい」

彼は言われるまま差し出されたその紙幣の束の一つを受け取った。受け取りながら危機を脱したことを感じていた。

「ところで奥様はどちらでしょうか」

「今奥に下がらせておりますが」

「そうですか。ではお嬢さんは」

「自分の部屋にありますよ」

「そうなのですか」

マンドリーカはそれを聞きヴェルトナーが手で指し示した部屋に目をやった。だがそれは一瞬ですぐに目を伏せた。

「呼びましようか、二人共」

彼の義理の母、そして妻になるかも知れないのである。それは当然であつた。

「いや」

だが彼はそれに対して躊躇いを見せていた。

「今ですよね」

「はい」

「今は少し……」

その整つた逞しい顔を赤くさせていた。

「おやおや、恥ずかしかる必要はありませんぞ」

「それはわかっていますか」

どうやら恋愛にはかなり純情であるらしい。

「ただはじめて会うというのはやはり神聖なことですし」

「そうですね。無理強いはしません」

ここで強制するような野暮なことはしなかった。ヴェルトナーはここで彼に任せることにした。

「私はこのホテルに泊まることにしましょう。そしてそちらからの御命令を待ちましょう」

「そうされるのですか」

「はい。それならば私も喜んでそちらにお伺いすることができますし」

「わかりました」

ヴェルトナーはそれを聞き賢明な判断だと思った。

「それでは」

マンドリーカは立ち上がった。

「部屋を取って来ますので暫し失礼」

「はい」

彼は頭を下げた。少し不器用な感じもするが礼儀正しい。頭を上げると彼はその場を後にした。

「では後程」

そして二人は別れた。ヴェルトナーは一人になるとテーブルの上に置かれている札束を見た。先程彼が置いていったものだ。

「まさかこんなことが実際に起こるとはな」

嬉しいことは事実だがにわかには信じられなかった。

「この札束が今私の目の前にあるということは事実なのだが。それにしても」

テーブルに近寄りその札束を手にした。かなりある。

「これだけあれば請求書のももホテルにツケにしているのも全て清算できるな。いや、それでもまだまだかなり余るぞ。信じられないな」

札を数える。そして思わず唸った。

「もうこれでギャンブルで危ない橋を渡って金を稼がなくていいな。本当に夢のようだ」

ここでその借金のことを思った。

「まずは一つ清算しておこうか」

そしてベルを鳴らした。すぐにボーイがやって来た。

「何でしょうか」

「うむ」

彼はそのボーイに対して鷹揚に頷いた。

「実はね」

そしてその札束のほんの一部を彼に渡した。

第一幕その九

「これでそちらの請求の分は全ていけるかね」

「は、はい」

ボーイはその札に戸惑いながらも答えた。

「おつりが来る程ですよ。今は持ち合わせがありませんが」

「後で持って来る、と言いたいのだね」

「え、ええ」

「今すぐでなくていいよ。まあ何時でもいい」

「わかりました」

人は金が入ると寛容になるものである。借金がなくなると余計にだ。

「私の用件はそれだけだ。下がっていいよ」

「はい」

「あ、そうそう」

ヴェルトナーはここでふと気付いたようにボーイに対して言った。

「おつりのうち半分は君へのチップだ」

「そんなにですか!？」

これには彼も驚いた。

「今までやれなかったからね。まあその謝罪も意味もある。いいか

らとっておきなさい」

「わかりました」

彼は笑顔で応えた。

「下がっていいよ」

「はい」

やはりヴェルトナーの声はゆとりのある鷹揚なものであった。

「では私はこれで」

「うん」

ヴェルトナーはやはり余裕のある顔で頷いた。

「伯爵」

ボーイは彼を爵位で呼んだ。

「何だね」

久し振りに貴族らしい態度で返す。

「以後も何なりと御命じ下さい」

彼はいささか大袈裟ともとれる程恭しく頭を下げた。彼はそれを余裕をもって受けた。

「うん、その時は宜しく頼むよ」

「はい」

そしてボーイは部屋を後にした。ヴェルトナーは一人になっても得意気であった。

「ふむ、久し振りだなこんな気持ちは」

「お父さん、どうしたの？」

その声に気付いたズデンカが部屋に入って来た。

「誰かおられたみたいだけれど」

「おお、御前か」

彼は娘に優しい顔で振り向いた。

「ちよつとな。素晴らしい方が来られてな」

「素晴らしい方？」

「そうだ。おかげで我々は助かったのだよ」

「助かったって何が」

「まあそれはおいおいわかるさ。御前が心配するようなことじゃない。いや」

彼はにこりと笑ってズデンカに対して言った。

「むしろ喜ばしいことだよ。御前にとってもな。さて」

彼はここでテーブルの上に紙幣を一枚置いた。そして身を翻した。思いもよらぬ軽やかな動きであった。

「用事が出来たのでこれでな。それではな」

そして部屋を出た。ズデンカはお札を見ながら呆然としていた。

「一体何があったのかしら」

事情を知らないので首を傾げることしかできなかった。

「賭け事に勝ったのかしら。そんな筈はないけれど。いえ、もしかして」

不吉な考えが胸を支配した。

「借金でもしたのかしら。けれどそんな筈はないし」

借りるあてもないからである。

「それじゃあ一体何かしら。けれどお金があつたらこの街から離れなくて済むし。そうしたら」

愛しい者の顔が浮かんだ。

「けれどそれは変わらないわ。あの人に会えるのは今日が最後。こればかりはどうしようもないのよ」

ここでまた扉を叩く音がした。

「今日はお客様が多いわね」

ズデンカはそれを聞いてそう思った。だがすぐにこう思い直した。

「けれどそれもそうね。懺悔の火曜日なんですから」

特別な日である。それならば納得がいく。彼女は自分にそう言い聞かせながら扉を開けた。

「君なの」

そこにいたのはマツテオだった。

「うん」

彼は深刻な顔で頷いた。

「気になることがあってね。また来たんだ」

「気になること？」

「そうなんだ。手紙のこと」

「ああ、そのこと」

ズデンカはそれを聞いて哀しい顔をせずにはいられなかった。

「?どうしたんだい」

マツテオもそれに気付いた。声をかける。

「あ、何でもないよ」

彼は慌てて自分の気持ち隠した。だが心の中では違っていた。

「そうか、ならいいのだけれど」

だが若く純真なマツテオはそれには気付かない。友と思っている若者の顔が戻ったのを見て安心した。

「もう書いてくれたかな、彼女は」

「返事を？」

「うん。その結果次第で決めるからね。転勤するかどうか」

「そうなの」

今度は哀しい顔を出すわけにはいかなかった。

「それは少し待って。僕が絶対に持つて来るから。今姉さんはその手紙を書いている最中なんだ」

「そうだったのか。じゃあ君に頼むよ」

「任せてよ」

彼、いや彼女はそれに対して無理して明るい顔を作って応えた。

「このホテルが舞踏会で渡すから。それまで待っていてね」

「頼むよ」

「うん、わかったよ。それじゃあ今は悪いけれど帰ってね。姉さんに見つかると厄介だから」

「わかったよ。じゃあね」

「ええ」

マツテオはこれで帰った。入れ替わりにアラベラの部屋の扉が開いた。

「準備はできた？」

「ええ」

見ればアラベラは見事な絹の純白のドレスに身を包んでいた。まるでプリンセスの様である。

「貴女もできてるわね」

「私は男の服だから」

ズデンカは目を伏せて姉に答えた。

「すぐに済むのよ」

「そうだったわね」

アラベラもそれを受けて目を伏せた。

「けれど心は別よ。例え服がそうであつても心は別よ」

「姉さん」

「貴女は女の子なのよ。それは忘れたら駄目よ」

「うん」

アラベラはズデンカに歩み寄りその手をとつて言った。ズデンカはそれを受けて頷いて応えた。

「では行きましょう。娘時代に別れを告げに」

「ええ」

姉に対して言おうとした。だがやはり言うことはできなかった。

二人は部屋を出た。そして下に待っていた櫓に乗る。そして舞踏会へと向かうのであった。

第二幕その一

第二幕 娘時代への別れ

舞踏会は華やかな空気に支配されていた。明るい灯りが照らす会場は螺旋階段により上のバルコニーと繋がっておりそのバルコニーは舞踏会場を酒や美食と共に見下ろせるようになっていた。今ここに一台の櫓が到着した。

「着きましたよ、フロイライン」

エレメールが櫓の後ろの扉を開ける。そこから長身の着飾った美女が姿を現わす。

「有り難うございます、ヘル」

アラベラは優雅に微笑んで櫓から降りた。その後ろからズデンカも姿を現わした。

「では行きましょう」

「はい」

二人はエレメールに手をとられ会場に入る。その入口にはヴェルトナーとアデライーデが立っていた。

「ようこそ」

「先に来ていらしたのね」

「ええ、貴女の姿を見たくて」

アデライーデは娘に優しく微笑んでそう言った。

「今宵は楽しみなさい。この宴を」

「ええ」

アラベラも微笑み返した。そしてズデンカと共に中に入って行く。

「貴女がエスコートして」

「うん」

弟、いや妹に優しく声をかける。妹はそれを受けて姉の手をとる。そして二人は中に入って行った。

「では私達も」

「ああ」

アデライーデはヴェルトナーに手を差し出した。彼はそれを受けて妻の手を取った。そして二人も中に入って行った。

「まずは御前に会って欲しい人がいるんだ」

「さつき話しておられた方ですね」

「ああ、是非会ってくれ」

「喜んで」

アデライーデは夫に案内され舞踏会の端に来た。そこには彼がいた。

「こちらの方だ」

ヴェルトナーはマンドリーカを妻に紹介した。

「マンドリーカ伯爵だ。どの様な方かは先程話した通りだ」

「こちらの方ですね。あらこれは」

アデライーデは黙って挨拶をする彼を見て目を細めた。

「立派な方ですわね」

「お褒めに預かり光栄です」

見れば彼もタキシードに身を包んでいる。長身に黒と白の服がよく合っている。

「遠い場所から来られたそうで」

「はい、ですが遠いとは思いませんでした」

彼はアデライーデに答えた。

「あの方に会えるのですから」

その声は熱いものであった。

「お嬢様はどちらにおられるでしょうか」

「娘ですか」

ヴェルトナーとアデライーデは目を細めたままそれに応えた。

「あちらです」

そして手で指し示す。そこにはズデンカに付き添われたアラベラがいた。

「彼女ですか」

マンドリーカはその姿を見て思わず息を呑んだ。

「素晴らしい。写真で見るよりも遙かにお美しい」

「また大袈裟な」

「いえ、本当です」

彼は二人の言葉に首を横に振った。

「あれ程美しい方は本当に今まで見たことがありません」

「そうですか。お気に入られましたかな」

「はい」

「では後はあの娘次第ですね」

「そうですね。果たして私を受け入れてくれるかどうか」

彼は俯いて言った。その顔に不安がよぎっていた。

「大丈夫ですよ」

そんな彼にアデライーデが励ましの言葉を贈った。

「貴方なら。ほら、気をしっかりと持たれて」

「は、はい」

そう言われてマンドリーカは少し戸惑った。だがすぐにその気になつた。

「ではそこでお待ちになっていて下さい。私が娘を呼んで参りますから」

「わかりました」

アデライーデはアラベラの方へ歩いて行った。そして娘と何やら話をした。やがて彼女がこちらにやって来た。

「娘のアラベラです。そしてこちらは息子のズデンコ」

アデライーデはアラベラと彼女をエスコートしていたズデンカを紹介した。

「はじめまして」

アラベラは頭を下げる。マンドリーカもそれに対して返礼する。

「アラベラと申します」

「マンドリーカと申します」

二人はそれぞれ名乗った。それを見たヴェルトナーとアデライー

デはズデンカを連れてそつとその場を離れた。そして二人だけとなった。

「あの」

先に口を開いたのはアラベラであった。

「どちらから参られたのでしょうか」

「はい」

マンドリーカはそれに対して答えた。

「深い森の中からです」

「森の中から」

「ええ。そこからこのウィーンに出て来ました」

「何故でしょうか」

「それは」

彼は顔を少し赤くさせた。迷った。だが思い切って言うことにした。

「実は……」

だがここで思わぬ邪魔が入った。

「フロイライン」

黒い髪に豊かな頬髯をたくわえた男がやって来た。そしてアラベラに声をかけてきた。

「ドミニク伯爵」

アラベラは彼を見てその名を呼んだ。

「一緒に踊りませんか、このワルツを」

聴けば音楽の前奏がはじまっていた。会場にいる者はそれぞれパートナーを選んで踊ろうとしていた。

「申し訳ないですが」

アラベラは微笑んで彼に対して言った。

「今この方とお話しておりますので」

「左様ですか」

ドミニクはそれを受けて退いた。そしてまた二人に戻った。

「お話の続きを」

「はい」

マンドリーカは彼女の許しを得て再び口を開いた。

「御父上から聞いてはいないでしょうか」

「残念ながら彼女は首を横に振った」

「そうですね。それなら」

彼はそれを受けてまた口を開いた。

「では詳しくお話させて頂きます」

「はい」

アラベラは耳を澄ませた。そしてマンドリーカに顔を正対させた。

彼はその顔に心を奪われずにはいらなかった。だが気を取り直し言葉を発した。

「私には美しい妻がおりました。まるで天使の様な妻でした。ですが」

彼はここで悲しげな顔になった。

「彼女は私の側には二年しか留まってくれませんでした。私を一人残して天界へ旅立ってしまった」

「それは気の毒です」

「私は長い間一人で悲しんでおりました。そんなある日一通の手紙が私のところに届けられました」

「手紙が」

「はい。それは貴女の御父上からの手紙でした」

「父が」

「そうですね。そこには貴女の写真が添えられていました」

彼はここで言葉に溜息を少し含まさせずにはいらなかった。

第二幕その二

「私はその写真を見て忽ち心を奪われました。その写真に私は恋を覚えずにはいられませんでした」

彼は言葉を続ける。

「深い森の中にいて悲しみに閉ざされた心を開いてくれたのです。

貴女が」

「私が」

「ええ。そして私はここまで来ました。貴女に御会いする為に。この街に出て来たのです」

言葉を続けようとする。だがここでまた邪魔が入った。

「フロイライン」

ワルツが終わったところであつた。大柄な男がアラベラの側に来た。

「こちらの方は」

「ラモーラル伯爵ですわ」

マンドリーカに説明する。二人は会釈をする。

ラモーラルはそれが終わるとアラベラをワルツに誘った。だが彼女の返事は先程と同じであつた。

また二人になった。華やかなワルツの調べと踊りが後ろを飾る。

「あの」

アラベラは彼に対して声をかけた。

「はい」

「お掛けになりませんか。貴方のお話を詳しくお聞きしたいですから」

「よろしいのですか？」

「喜んで」

アラベラは微笑んでそれを了承した。二人は側にあるテーブルに向かいに座った。

アラベラは優雅な微笑みをたたえてマンドリーカを見ている。彼はそれを受けて内心ホツとしていた。

(話は聞いてもらえるようだな)

「あの」

まずはアラベラが口を開いた。

「はい」

「では詳しいお話を」

「わかりました」

彼はそれを受けて話をはじめた。

「私には叔父がおりました。かつて貴女の御父上と共に騎兵隊におりました」

「父とですか。それはもうかなり前のことでしょう」

「はい。その頃私は幼かった。そして何も知らなかった」

話す彼の心の中に森が浮かんだ。

「そして当然貴女のことも知らなかった。当然ですが」

「それはまあ」

アラベラはそれには苦笑するしかなかった。

「それから時が経ち私は今の姿になった。そして孤独に沈んでいた」

「奥様のことですね」

「ええ。そんな時に私のところに一通の手紙が届けられました。本来は叔父のものでしたが」

「叔父様はどうなされたのです?」

「亡くなりました。急な病で」

「そうでしたの」

アラベラは問うてはいけないうことを問うたと思った。思わず顔を伏せる。

「申し訳ありません、酷いことを尋ねてしまって」

「いえ、いいのです」

だがマンドリーカはそれを気にはとめなかった。

「叔父は安らかに旅立ちましたから。私はそれを見て叔父が天国の

平和を得たのだと思いましたが」

「そうなのですか」

「はい。その手紙は本来は叔父に宛てられたものでした。ですが一人となった私が受け取ったのです」

「そこに私の写真が入っていたのですね？」

「そうです。そして私はこの街に来ました。貴女に御会いする為に」

「まあ」

アラベラはそれを受けて顔を明るくさせた。

「嬉しいですね。私なぞの為に。ですが」

彼女はここでためらいがちに顔を伏せた。

「私にそこまでして頂く価値はありませんわ」

「いえ」

だがマンドリーカはそれに首を横に振った。

「私にはあります。貴女はそれ程素晴らしい方なのですから」

「またそのような」

彼女は身を引くそぶりを見せた。だがマンドリーカは真剣であった。

「私の全てを貴女に捧げましょう。それが偽りだと思われるなら……」

彼はここで一旦言葉をとぎった。それから再び口を開いた。

「私は永遠に貴女の前から姿を消しましょう」

「そこまで思われているのですか」

「はい、この想い、神にかけても誓いましょう。永遠に変わらないと」

彼の声は次第に強くなってきた。アラベラはそれを受けて頷いた。「わかりました」

そしてこう言った。

「今まで私は待つていました。私を心から愛して下さる方を。私を力強く愛して下さる方を」

マッテオにも他の三人の伯爵達にもそうした愛はなかった。彼等

はただ彼女を崇拜する愛であつた。

だがアラベラはそれを本当の愛とは思えなかつたのだ。マンドリーカのように純粹で、それでいて力強く自分に向かつて来てくれる、そんな愛を待つていたのである。

「では……」

「はい、私は元々決めておりました。今日で娘時代に別れを告げるともりだと」

「別れを、ですか。娘時代に」

「ええ。そして新しい時代に足を踏み入れるつもりでした」

「それが今日」

「そうですね、そしてその永遠の伴侶を選ぶつもりでした。そしてその人が今日私の前に姿を現わして下さると信じておりました」

彼女はそう言いながらマンドリーカを見据えていた。目の光が強くなつていた。

「そして今姿を現わして下さいました」

「それは……」

「貴方ですわ」

アラベラは微笑んでそう言った。

「ようやく私の前に姿を現わして下さいましたね」

「はい」

マンドリーカはそれを受けて頷いた。

「私を選んで下さつたのですね」

「いえ、違いますわ」

アラベラは首を横に振つて答えた。

「貴方が私を選んで下さつたのです、永遠の伴侶に」

「では……」

「はい。貴方の申し出を謹んで受け入れさせて頂きます」

それで全ては決まつた。アラベラの娘時代が今終わりの始まりに入つた。

二人はその終わりの始まりの中に足を踏み入れた。だがそれはあ

くまで終わりの始まりであり全てが終わったわけではないのである。

「それでは水が必要ですね」

「水？」

「はい、これは私の故郷の習わしなのですが」

マンドリーカはそれについて話をした。

「結婚が決まった娘は自分の家からコップに一杯の清らかな水を夫となる者のところへ運んで来なければなりません。結婚を清める水を」

「そんな習わしがあるのですか」

「はい、私の故郷だけでしょうが」

彼は熱い声で語った。

「美しい習わしですよ。これにより二人は清められ神の祝福を得られるのですから」

「そして晴れて結ばれるのですね」

「はい」

彼は答えた。

「是非私も貴女から水を受け取りたい、清らかな水を」

「わかりました」

アラベラは微笑んで答えた。

「ではその時に」

「わかりました。ではその時に」

二人は頷き合った。そして心は今その水を受け取っていた。だが本当の水はまだであつた。

第二幕その三

「けれどその時はもう少し待って頂けますか」

「どれ程ですか？」

「一時間程。娘時代に最後の別れを告げたいので」

「わかりました」

マンドリーカはそれを認めた。

「では私は喜んで待ちましょう。貴女がその清らかな時代に最後の別れを告げられるのを」

「有り難うございます」

だが礼を言う彼女の顔にすっと影が差した。マンドリーカは不意にそれに気付いた。

「どうされたのですか？」

「はい。やはり寂しいものですから」

彼女は力なく微笑んでそう答えた。

「楽しかった今までの娘時代。それが終わると思いますと」

「そうですね。私もそうでした」

マンドリーカにもそれはわかった。

「私もあの子供だった時が懐かしい。少年だった時も。今はもう戻ってはきませんが」

「ええ」

「それと別れを告げられに行かれるのですね。お辛いですよ」

だがそれは誰もが潜り抜けなければならぬものである。マンドリーカもそれはわかっていた。

「ええ。けれどやらなくてはなりませんから」

そう言つてまた微笑んだ。今度は強い笑みであった。

「それではこれで」

そして席を立った。マンドリーカは微笑みでそれを送る。

「どうぞ」

「はい」

こうして彼女は席を立ちその場を後にした。そして娘時代への決別に向かった。ここで不意に場内が騒がしくなった。

「!？」

マンドリーカはその騒がしくなった方に顔を向けた。見ればそこに大勢の人だかりができていた。

「パーティーのメインディッシュでも来たかな」

だがそれは違っていた。見れば誰かが来たらしい。

「身分のある方から。いや違うな」

そうだとするとここにいる者全てに声がかかる筈である。どうやらそういうものではないらしい。

「おい、フィアケルミリが来たぞ！」

その人だかりの中の誰かが言った。

「フィアケルミリ？誰だそれは」

マンドリーカは立ち上がってそれを見て呟いた。

「おや、御存知ないですか」

そこで側を通り掛かった男がそれに応えた。

「ええ、遠くにいましたので」

「そうですか。では仕方ありませんね」

彼はそれを聞き納得したように頷いた。

「今売れっ子の女優でして。歌手でもあります」

「女優ですか」

彼にはあまり縁のない職業であった。あまり劇場には行かない彼にとっては女優と言われてもピンとくるものはない。

「そうです、とにかく美しいと評判でしてね。一度御覧になられるべきかと」

「そうですか」

だが彼は動く気にはなれなかった。その場に立っていることにした。

「あの人が戻って来るまでここにいるとするか」

そして騒ぎをよそに一人酒や食べ物を楽しんでいた。

「ふむ」

少し武骨ではあるが気品は備わっている動きであった。

「いいな。やはりウィーンだけはある」

彼はテーブルの上の料理を食べながら呟いた。

「洗練されているというのはこうした料理を言うのかな。うちの料理とは違う」

だが彼はそう思いながらも故郷の料理も思い出していた。

「私にはどちらが合うかな」

それは自分でおおよそのことはわかっていた。だが今はこの都の酒と料理を楽しむことにした。

「土産話にはいいな」

彼は食べ続けた。そして騒ぎには背を向けるのであった。

その頃フィアケルミリは男達に囲まれながら螺旋階段のところに来ていた。

「皆さん」

彼女は高い声で周りにいる彼等に声をかけた。

小柄で丈の短い白いドレスを身に纏っている。明らかに舞踏用のドレスではない。どちらかと言うと演劇用であろうか。そして羽のついた絹の帽子を被っている。その帽子からは金色の巻いた毛が零れ落ちている。

その金色の巻き毛が覆う顔は白く可愛らしい顔立ちをしている。まるで少女のようにあどけない表情だ。そしてその中に湖よりも青い瞳と紅の薔薇の色をした唇がある。その唇の端の笑みはあどけない顔とは違って誘惑を漂わせている。少女の趣と娼婦の妖しさを併せ持った顔であった。そしてドレスの胸には深紅の花があった。

「皆さんは天文学にはお詳しいでしょうか」

彼女は彼等にそう尋ねた。

「いえ」

彼等はそれに対して首を横に振った。

「残念ながら私達は」

「どうやらこの場には天文学者はいないようである。」

「そうですか」

「だが彼女にとってそれはどうでもいいことであるようだ。言葉を続けた。」

「皆様は御自身のことがわかつてはおられませんわ」

「彼女はくすりと笑ってこう言った。」

「といたしますと」

「殿方は生まれつきの天文学者ですわ。星を探し出すことのできる天才ですから」

「はて」

「だが彼等はそれには首を傾げた。」

「それはどういう意味ですか」

「うふふ」

「ここでフィアケルミリは笑い声を出した。それから答えた。」

「皆さんは星を探し出されるとそれを崇められますわ。そしてその星とは」

「螺旋階段の下に彼女がいた。アラベラである。」

「こちらの方ですわ」

「そう言いながら胸に差していた花を手にとった。そしてそれをこちらに顔を向けたアラベラに投げる。」

「アラベラはそれを手にした。そこで一同は歓声に包まれた。」

「また賑やかだな」

「マンドリーカはそれをよそにまだ食事を探っていた。そこに誰かがやって来た。」

「あら」

「それはアデライーデであった。」

「貴方だけですわ」

「はい」

「彼はそれに答えた。」

「アラベラは」

「別れを告げられに行かれました」

「別れを。誰にですか？」

「娘時代にです」

彼はそれに対して微笑んでそう答えた。

「新たな時代に足を踏み入れられる為に」

「そうだったのですか」

アデライーデもそれを聞いて微笑んだ。

「それでは安心ですわね」

「はい、あの方は素晴らしい方です」

彼はうっとりとした眼差しでこう言った。

「姿だけでなく心までも素晴らしい」

「それは買い被りですわ」

アデライーデは娘があまりにも褒められているので恐縮してしま
った。

「いえ、私はそうは思いません」

だが彼はそれを否定した。

「私は決めました。あの方を妻に迎え入れたいです。そしてあの方
もそれを受け入れて下さいました」

「まあ、それは」

「そして貴女と貴女の御主人をこれからは父、そして母と御呼びし
たいのですが。宜しいでしょうか」

「喜んで」

彼女はそれを受けて静かに頭を下げた。二人もまた来たるべき幸
福を楽しみに待っていたのであった。

第二幕その四

だがここに不安に心を支配されている二人がいた。

「アラベラはここなんだね」

マツテオは焦燥にかられた顔で後ろにいる少年に対して言った。

「うん、そうだよ」

ズデンカは彼を気遣いながらそれに答えた。

「遂にここまで来たけれど」

その声も不安に満ちたものであった。

「けれど彼女は僕には目もくれないだろうな」

そう言っただけで溜息をついた。だがズデンカがそんな彼を励ました。

「そんなことないよ。姉さんが愛しているのは君だけだよ」

「君はいつもそう言ってくれるけれど」

今の彼にはその言葉を信じることはできなかった。

「気を確かに持って、ね」

「うん」

彼、いや彼女に励まされながら辺りを見回す。ズデンカはそんな

彼に対して言った。

「ちょっと待つていてね。姉さんを探して来るから」

「探してきてくれるのかい？」

「そうだよ。だからここで待つていてね」

「わかったよ」

彼はそれに頷いた。ズデンカはそれを見てそこから立ち去った。

そして会場の周りを探しはじめた。

「彼はいつもああして僕の為に尽くしてくれるけれど」

だがマツテオはそれを哀しげな瞳で見ている。

「僕にはわかってるんだ。結果がやっぱり明日には異動を願い出よ

う。そして全てを忘れよう」

そして側の椅子に崩れ落ちた。彼は完全に希望を見失っていた。

しかしズデンカは違っていた。何としても彼を救おうとしていた。必死に姉を探し回る。だがその姿は何処にもなかった。

「ここにはいないのかしら」

次第に焦りを覚えはじめた。ふとそこに両親の姿が目に入った。

「あれは」

彼女はそれを見て身を隠した。

「今見つかつてはいけないわ。姉さんに知られるかも」

彼女は別の場所へ移った。そしてまた姉探しをはじめた。

「お待たせしました」

マンドリーカは二人のところに戻って来た。どうやら何か都合があつたらしい。

「いやいや」

ヴェルトナーは笑顔で彼を迎えた。

「私も今ここに戻って来たばかりですから」

「そうですか。それならよかったです」

マンドリーカもそれを受けて微笑んだ。そして二人に言った。

「では宴もたけなわですし食事にしますか」

「いいですな。御前はどう思う？」

彼はここで妻に問うた。

「私もそれに賛成です」

彼女も拒む理由はなかった。微笑んでそれに応える。

「それならよかったです。実は先程この給仕に話をしまして」

「はい」

「お酒と料理を用意してもらいました。全て私からの贈り物です」

そこで会場に豪華な料理とワイン、そしてシャンペンが山のように送り込まれてきた。

「さあどうぞ。そう」

彼はここで会場にいる全ての者に対して言った。

「ここにいる全ての方に！今日は私の祝いの日ですから！」

「おおー！」

「本当ですか!？」

「はい！」

彼はそれに応えた。

「さあ皆さん今宵は存分にお楽しみ下さい。このマンドリーカ、是非皆さんに喜んでもらいたい！」

そして彼は給仕を呼んだ。

「いいかい」

注文を開始した。

「まずは馬車を一台、いや二台用意するんだ」

「わかりました」

その給仕はそれを聞いて頷いた。

「それから花屋に頼んで店の売り子を起こすんだ」

「何故ですか？」

「決まっているじゃないか」

彼はここにこりと微笑んだ。

「花を買った。いいかい、ここからが肝心だ」

「はい」

そう言われて給仕は顔を引き締めさせた。

「まずは薔薇だ。それも一つの馬車に紅と白の薔薇を半分ずつ」

「わかりました」

給仕はそれをメモした。

「そしてもう一つは椿だ。こっちも紅白で」

「半分ずつですね」

「そうだ。全ては私の妻となる人の為。いいかい」

「勿論です」

彼はそれを受けて笑顔で答えた。

「それにしても何という素晴らしい贈り物でしょうか。そこまでの花を贈られるとは」

給仕はそう言って彼を称賛した。

「いや、当然のことだよ」

だがマンドリーカはそう返した。

「私は彼女を愛しているのだから。彼女はその花の上で踊るんだ。娘時代の最後の踊りを」

「貴方の贈られた花の上で」

「そう、そして私は彼女を迎える。私達はそして永遠に結ばれるんだ」

声も表情も恍惚となっていた。彼は半ば夢の世界にいた。だがそれは現実の夢であった。

「では頼んだよ。すぐにね」

「はい」

給仕は答えた。既にメモはとつてある。

「紅と白の薔薇を一つの馬車に、そして同じく紅と白の椿をもう一つの馬車に」

「うん」

「では暫しお待ちを。花の山が貴方達を祝福するでしょう」

そして給仕はその場を後にした。花の山を持って来る為に。

アラベラはこの時バルコニーにいた。そこで誰かを待っていた。

その瞳は窓の向こうの夜空を見ていた。そこには濃紫の空がある。そしてそこには無数の星達もあった。色とりどりの光を放っていた。

彼女はそれを見ていた。見ながら一人想いに耽っていた。

「かつてこれ程までに夜がいとおいしいと思ったことはなかったわね」

彼女はふとそう呟いた。

「娘時代には思わなかったことなのでしょう。そしてこれからはどう思うようになるのかしら」

星が彼女の青い瞳の中に映る。それは静かに瞬いていた。

「夜が怖かった時もあつたわね。そして月や星の美しさにだけ見惚れていた時もあつたわ」

幼かった頃と娘だった頃。だが今は違う感情を持つようになっていた。彼女は次第に娘ではなくなっていた。

「これからはこの夜の空を一人ではなく二人で見たい。そう」
ここで彼の顔が頭に浮かんだ。

「あの人と」

そこへ会場のスタッフがやって来た。

「ドミニク伯爵をお招きしました」

「有り難うございます」

彼女はそのスタッフに振り向いて礼を言った。

「御苦労様です」

「いえ、そのような」

礼を言われた方が恐縮してしまった。それ程までに優美な微笑みであった。

彼は下がった。そしてドミニクが階段を上がって来た。

「フロイライン、ここに私をお招きした理由は」

「はい」

アラベラは一瞬目を伏せた後で答えた。

「先程の踊りですが」

「はい」

「あれは私の最後の踊りです」

「といたしますと」

彼にはその言葉の意味がよく理解できなかった。問わずにはいられなかった。

第二幕その五

「私はこれからは一人の方とだけ踊ることになりますので」

「それはもしかして」

彼はそれが自分への告白ではないのはわかった。彼女の言葉の様子でわかった。

「ええ。今度御会いする時は若い時、娘時代のお知り合いということになるでしょう」

「フロイライン」

彼はそれを受け入れたくはなかった。アラベラに何か言おうとする。だがアラベラはそれより先に言った。

「貴方の御厚意はわかっておりますわ。けれど私は」

「そうですか」

彼は目を伏せて頭を下げた。

「では仕方ありませんね」

「はい」

彼はそれでバルコニーを去った。そして次の者が来た。

「御呼びですか、フロイライン」

今度はエレメールがやって来た。

「伯爵」

アラベラは彼に声をかける。そして前に出た。

「握手をして頂けませんか」

そして手を差し出す。

「ええ、喜んで」

彼にはその握手の意味が大体わかっていた。拒みたかった。だが拒むことはできなかった。

握手をした。そして二人は手を離れた。

「握手して頂き感謝していますわ」

「はい」

「ではさようなら。今度御会いする時は今とは違いますが」

「ええ、わかつておりますよ」

彼は微笑んでそれに応えた。

「御幸せに」

「有り難うございます」

エレメールは頭を垂れた。そして彼もその場を去った。

アラベラは窓に目を向けた。だがすぐにまた誰かがバルコニーにやって来た。窓越しにそれが見えた。

「ラモーラル伯爵」

彼女はそれを確認して彼に身体を向けた。

「御待ちしておりますわ」

「そうですか。呼んで頂き感謝しております」

「はい」

「貴女の仰ることはわかつております。先程御二人とすれ違いましたから」

「そうですか」

「彼等は何も言いませんでした。そして私も何も言いません。ただ」

「ただ？」

「最後にその手に接吻をすることをお許し下さい」

「わかりました」

彼女は微笑んでそれを受け入れた。そして手をすつと差し出す。

ラモーラルはその前に跪いた。そしてその手に自らの手を添え口を近付ける。そして接吻をした。

それを終えると立ち上がる。そして言った。

「さようなら」

「はい」

ラモーラルも去った。こうして彼女の別れは終わった。

「終わったわね」

今娘時代への別れが終わったことを感じていた。

「あとはあの人に水を捧げるだけね」

不意にここで夜空に浮かぶ水瓶座のことが頭に浮かんだ。

今窓からはそれは見えない。だが心にそれを見ていた。

天空の神ゼウスが自らの側に置く為に驚となってさらった少年である。だが彼女は今そこにその少年とは別のものを見ていたのだ。

「結婚を祝福する清らかな水」

それが今の彼女の心の中にあつた。

「私の手の中にそれが入る。そして私はあの人にそれを捧げる。それで私の娘時代は完全に終わる。そして私は」

彼女は夜空の中にある白く一際大きな星を見た。

「あの星を二人で見ることになるのね」

そして微笑んだ。目を伏せるとその場を後にした。バルコニーにはただ星とキャンドルの光だけがあつた。

その頃マツテオはズデンカと共にいた。

「姉さんはいたのかい？」

「え、ええ」

彼女はその問いに戸惑いながらも答えた。

「そうか、それならいいけれど」

彼はそれを聞いてとりあえずは胸を撫で下ろした。

「そして何と言ってるんだい」

「うん」

彼女はここで一瞬目を伏せた。だが顔を上げてマツテオに対して言った。

「手紙を預かってきたよ」

「手紙か。まさかそれは」

「そうさ、君の手紙への返事だよ」

彼はそこで懐から一通の手紙を取り出した。

「これさ」

そして彼にそれを差し出した。

「気持ちは有り難いけれど」

だが彼はそれを手にしようとはしなかった。

「どうして？」

ズデンカはそんな彼に問わずにはいられなかった。

「怖いんだ、受け取るのが」

彼は沈みきった顔で答えた。

「もし絶縁の手紙だったら」

「そんな筈ないよ」

「いや、やっぱりいいんだ」

彼は臆病になっていた。

「やっぱり転属を願い出ることにするからそれでいいだろう」

「諦めるには早いよ」

「もう充分だよ。結局彼女は僕には高嶺の花なんだよ」

「マッテオ」

だがズデンカはその手紙を無理矢理彼に手渡した。

「開けてみて」

「ここがかい？」

「そうさ。そうしたらわかるよ」

ズデンカはそう言った後で顔を逸らした。そして心の中で呟いた。

（私の気持ちは届かなくてもいいわ）

「わかったよ」

彼はようやく頷いた。そして意を決して手紙を開けた。そこから

鍵が姿を現わした。

「これは」

「何処の鍵か知りたい？」

「うん。何処の鍵だい？」

彼はズデンカに問うた。

「しかも手紙はないし。これはどうということなんだい？」

「部屋の鍵だよ」

「部屋の」

マッテオには何が何だかまるでわからなかった。

「こっちに来て」

ズデンカはここでマツテオを隅に導いた。

「うん」

彼はそれを受けてそこにきた。ズデンカはそれで話をはじめた。

「姉さんの部屋の鍵だよ」

「まさか」

「本当だよ。僕は嘘は言わない」

ここでマンドリーカが通り掛かった。

「おや、あれは」

見ればズデンカがいる。彼は目を止めた。

「ここで何を話しているのだ」

本来なら立ち聞きなぞしない彼だがこの時ばかりは何故か違った。ふと足を止めてしまったのだ。

第二幕その六

しかも話をしているのは軍服の男である。どうやら将校のようだ。
「若いな。それに顔立ちもいい」

だが彼の顔が暗いものであることも見逃さなかった。

「訳ありなのかな」

さらに気になった。それで耳を澄ませた。

「姉さんの部屋の鍵だよ。嘘は言わないから」

「本当なのか」

マッテオにとっては夢の様な話であった。マンドリーカにとって
も。

「どういうことだ」

彼はそれを聞き顔を顰めさせた。

「聞き違いか！？私の」

だが違った。その証拠にズデンカは続けた。

「よく聞いてね」

「うん」

マッテオはここで彼の声が女のものだということに気付かなかった。
た。マンドリーカもであった。彼等は冷静ではなかった。

「まずこの鍵で部屋に入ってね」

「わかった」

（本当は私の部屋の鍵なのだけれど）

しかしそれは決して言うことはない。

「彼女はすぐに来るわ。わかったわね」

「うん」

マッテオはそれに頷いた。

「彼女は絶対に貴方を不幸にはしないわ。だから安心してね、本当
に」

「本当なんだね！？」

マツテオは問うた。

「ええ」

ズデンカはそれに頷いた。

「すぐにね。だから安心して」

「うん」

マツテオはようやくその話を信じられるようになってきた。マンドリーカはまだ信じられない。

「じゃあね。僕はこれで」

（用意しないと）

「わかったよ」

彼は頷いた。

「じゃあ行こう。いつも有り難う。今回は特に」

「いいのよ」

ズデンカは目を伏せた。やはりその声も言葉も女のものとなっていた。しかし純真なマツテオがそれに気付く筈もなかった。マンドリーカは普段なら気付いたであろうが今の状況ではそれは無理であった。

「それじゃあ」

「うん」

ズデンカは先に行った。マツテオはそれを暫く見送っていた。

「女の人の心とはわからない。これはどうということなんだ」

「おい」

マンドリーカは彼に後ろから声をかけた。しかしマツテオはそれに気付かなかった。そして立ち去った。

「しまった!」

追おうとする。しかし速い。追いつけはできそうにない。

「しまった・・・・・・」

マツテオは去ってしまった。マンドリーカはその消えていく後ろ姿を見て顔を顰めさせて首を横に振った。

「もしかと思うが。いや」

彼は考え込まずにはいられなかった。

「そんな筈はない」

その顔は蒼白になっていた。

「アラベラという女性がこの場に二人いる、いやそれはない」

ズデンコが言っていた。それが何よりに証拠であった。

「しかし彼女は今もこれから会場にいる。彼に会うとしてもそんなことはできはしない筈だ」

冷静になろうと務める。しかしそれは不可能であった。

「抜け出る！？どうやって」

ここで音楽が耳に入ってきた。美しいワルツの調べだ。

「あの曲に紛れて。全ては宴の中なのか。そして彼女は姿を消す」

踊りを終えた人々が出て来た。場所を移すのだ。今度は酒を本格的に楽しむ為に。そして賭け事や話を。宴は新たな場に移ろうとしていた。

「むっ」

彼は出て来る人々を見た。だがそこにはいなかった。

「やはりいないのか。それではやはり」

出て来る人々の中にはフィアケルミリもいた。しかし彼はそれには気付かない。考え続ける。

「うっむ」

ここでフィアケルミリが彼に話し掛けてきた。

「もし」

「はい」

彼はそれに顔を向けた。

「何でしょうか」

「貴方は場所を移られないのですか？ここに立ってばかりのように見受けられますが」

「それですが」

暗い顔をして答えた。

「ちよっと事情があります。もう少ししたら向かいます」

「そうですか」

彼女は納得できなかったがその場は退いた。そして男達に取り囲まれながら宴の場に向かった。

そこからは既に酒や食べ物を楽しむ声が聞こえてきている。多くの者はそれを聞いて自分も心を楽しくさせていく。だがマンドリーカだけは違っていた。そこに彼の従者の一人が来た。

「旦那様」

「どうした」

彼はその従者に対して答えた。

「お手紙を預かっておりますが」

「誰からだい!？」

声は怖いものとなっていた。だが彼はそれに気付かない。

(もしや)

ふと思った。そしてそれは当たった。

「アラベラ様からです」

「やはりな。ちょっと待て」

彼は自分の従者に言った。

「手紙を調べてくれ」

「手紙をですか」

「そうだ。鍵が入っていないかな。頼むぞ」

「はあ」

彼は言われるまま手紙を調べた。

「そのようなものはないようですか」

「そうか」

だが彼の不安は増す一方であつた。

「気になるな」

彼は顎に手を当て考えに入った。

「恐ろしい。この手紙が」

「では読まれるのを止めますか？」

「いや、それは待ってくれ」

だがマンドリーカは読まないではおれなかった。

「読もう。手渡してくれ」

「はい」

従者は主に言われるままにその手紙を差し出した。そして彼は手紙の封を切った。そして中身を取り出した。

第二幕その七

それから読みはじめた。

「今日は貴方に『お休み』と申し上げます。私は家に帰ります」
彼はそれを読んで愕然とした。

「やはり……！」

その次の『明日から私は貴方のものです』という言葉はもう目には入らなかつた。彼は憤りで身体を震わせた。

「彼女の名前すらない。小文字のイニシャルがあるだけだ。それも当然か、私の様な者には」 憤りを必死に抑えながら言う。

「所詮私なぞその程度なのだ、田舎者には」

心の中を悔しさが支配していく。だがそれを何とか抑える。

しかしあちこちから溢れ出るのは我慢できなかった。

彼は従者に顔を向けた。

「おい」

「はい」

彼は主に何時になく怖い顔に驚きを隠せなかつた。彼は普段は極めて温厚で寛大な主人であるからだ。

「すぐにここにいる人達にふんだんにふるまうってくれ。私の奢りでな。お金はあるから」

そして懐から財布を取り出しそこから札束のかなりの部分を取り出した。

「これで足りるだろう」

「わかりました」

ここは意見をすることを止めた。彼は頷くとその場から姿を消して難を逃れた。

「何ということだ」

マンドリーカは従者が去った後会場へ戻った。ガックリと肩を落としていた。そこでアデライーデがやって来た。

「もし」

「はい」

彼はただならぬ顔で彼女に顔を向けた。

「何でしょうか」

「私の娘達は何処でしょうか」

「それは私がお聞きしたいです」

彼は溜息混じりにそう言った。

「彼女が何処にいるか。ここでないことは確かでしょうが」

「それはどういう意味でしょうか」

彼女も彼の只ならぬ様子に気付いた。

「宜しければお話しませんか」

「お話することなぞ」

彼はそう言つて顔を顰めさせた。

「私にはありません。ですが貴女の娘さんにはおありでしょう。色々と弁明が」

「弁明」

彼女は彼の言葉とその口調に嫌な思いをせずにはいられなかった。

「御言葉ですが」

そして反論せずにはいられなかった。

「私の娘は人に弁明するようなことはありませんよ」

「それはどうだか」

シニカルに返そうにも感情が憤っている為それもかなわなかった。

「人には色々と表裏がありますからね」

「どういう意味ですか!？」

これにはアデライーデも力チンときた。

「私の娘を侮辱することは許しませんよ」

「侮辱!？とんでもない」

彼はすぐにそれに返した。

「私は事実を申し上げているだけですから」

「.....」

アデライーデは沈黙した。だがそれは言葉がないからではなかつた。怒りにより沈黙しているのであつた。そこにヴェルトナーがやつて来た。

「おや、どうしたんだい？」

彼は二人の様子に慌ててこちらにやつて来た。

「あなた」

アデライーデは夫に援軍を頼んだ。

「あなたからも仰つて下さい」

「何をだ？」

マンドリーカを見ながら妻に応えた。

「娘を守つて下さい、お願いですから」

「アラベラをか」

「はい」

彼女はそれに頷いた。

「一体何のことかよくわからないが」

彼はいぶかしながらマンドリーカを見ている。

「例え誰であれ娘を侮辱するのなら許さないぞ」

「そうですか」

マンドリーカはそう言われても頑なであつた。

「では貴方は娘さんが私を騙しておられてもそう仰るのですね」

「騙すだと!？」

彼はそれを聞いて血相を変えた。

「取り消したまえ、娘は決してそんなことはしない」

「それはどうでしょうか」

だが彼も引き下がらなかつた。

「現に娘さんはここにはおられないのですよ」

「それは本当か!？」

彼は妻にそれを尋ねた。

「私も探しているのですが」

アデライーデも弱つていた。

「ほら、御覧なさい」

マンドリーカはそれを見て言った。本来ならここで皮肉っぽく言うのであるが彼の気質と今の感情がそれを許しはしなかった。

「おそらく御自身の部屋ではないでしょうか」

ここで彼は言った。

「何があつたのかはわかりませんが」

「それは本当か!？」

ヴェルトナーは彼、そして妻に問うた。

「ここにいないとなると」

彼女は弱い声でそれに答えた。

「あの娘、気紛れだから」

「よし」

彼はそれを聞いて頷いた。

「ではすぐに向かおう、いいな」

「はい」

「喜んで」

アデライーデとマンドリーカは彼の言葉に頷いた。

「ではこれで決まりだ」

ヴェルトナーはそう言うのとマンドリーカに顔を向けた。

「一緒に来たまえ、いいね」

「はい」

彼もそれを了承した。そして三人はその場を後にした。その後ろでは華やかな宴がまだ続いていた。

第三幕その一

第三幕 二人の世界へ

アラベラのいるホテルはこのウィーンでも豪華なことで知られている。だからこそヴェルトナーもここに居を決めたのである。洒落者の彼がいたく気に入ったのである。

そのホテルに今一台の轎が着いた。そしてそこから一人の女性が姿を現わした。

「御苦労様」

彼女は轎の御者に微笑んで言葉をかけた。御者は金を受け取るとその場を後にした。彼女はそれを見送るとホテルのホールに入った。

「ふう」

その入口でクロークを脱ぐ。雪を払うと入口にかけた。

「これで全ては終わったわ」

その女性、アラベラは彼女自身に微笑んでそう言った。

「これで私はあの人のもの。これからは永遠に一緒なのね」

彼女もマンドリーカに心を奪われていた。彼は彼女が夢にまで見た理想の人なのであった。

「もうすぐあの人と一緒にあの人の国へ入る。そしてそこで静かに暮らすのね」

早くそうしたくてならなかった。彼女は華やかな舞踏会よりも心の幸せを願っているからだ。

彼女はゆっくりと自分達の住む二階の部屋に入ろうとする。まずは階段を上がる。古いが頑丈な造りの木の階段である。そこでその部屋の扉が開いた。

「あら」

最初はそれを見てズデンカだと思った。

だがその予想は外れた。中から出て来たのはマツテオであった。

「えっ……」

マツテオは彼女の顔を見て驚いた顔をした。

「どういうことなんだ！？彼女は確かに」

今出て来た部屋を見る。

それからアラベラを見る。だがまだ腑に落ちない顔をしている。

「あら、マツテオ」

ここでアラベラが彼に声をかけてきた。

「どうしたの？ズデンコなら舞踏会にいるわよ」

彼女は妹の真意と行動について全く何も知らなかった。だからこ
う言ったのだ。

「ズデンコって」

しかし彼はまだ腑に落ちない顔をしていた。

「一体何を言っているんだ！？」

「何って」

無論彼女にもわかってはいない。

「今さっき」

「帰って来たばかりですが」

アラベラはそう言った。

「舞踏会から」

「馬鹿な」

だがマツテオはそうは受け取らなかった。

「抜け出たではありませんか、その舞踏会から」

「いえ」

しかしアラベラはそれを否定した。

「区切りがついたところで帰りました。そして今ここに辿り着いた
のです」

「またそんな」

無理して苦笑する顔を作った。

「そんな筈がありません」

「いえ、本当です」

さらに訳がわからなくなってきたがそう答えた。

「その証拠にほら」

ここで手に付いた雪に気がついた。丁度いいのでそれを見せる。手に雪がまだ付いていますでしょうか？」

その雪を見せる。見れば結晶が灯りに照らされ輝いていた。

「しかし貴女は」

「申し訳ありませんが」

アラベラはまだわからないことばかりであったが疲れていたのもう休みたかった。それで彼に対して言った。

「部屋に入れて頂けませんか？今日はもう休みたいので」

「休む？一人で」

「ええ。勿論」

彼女はそう答えるしかなかった。

「少なくとも今宵までは」

「そう、今宵までは」

マツテオはそれを受けてそう言った。

「だが明日からは違うんだね」

「ええ」

ここで彼女は彼が何故そう言うのか不思議でならなかった。彼女とマンドリーカのことには知らない筈なのに。そして彼女が今日で娘時代と別れることも。

「しかし僕は違うんだ」

「どういうことですか！？」

彼女は話をしながら彼が普段の彼とは様子が少し異なることに気付いた。

「いい加減にしてくれませんか」

彼はアラベラの態度に遂に痺れを切らした。

「何をですか！？」

だが彼女にはまだ何もわかってはいなかった。さらに首を傾げた。「私には貴方が私に何を仰りたいのかよくわからないのですが」

「アラベラ！」

彼はここで語気を少し荒わげた。

「何を言っているんだ、とぼけるのもよしてくれ」

「とぼけてなんかいませんわ」

彼女は少し腹立たしさを感じながらも穏やかな言葉で返した。

「先程も申しましたように私は今帰ってきたばかりですから」

「またそんなことを言う」

彼は次第に顔を曇らせてきた。

「あの時君は」

「あの時とは」

彼女はすぐに返してきた。

「さっきのことを忘れたとは言わせないよ」

「ですから私は」

今帰って来たばかりだと言おうとした。しかしマツテオがそれを遮った。

「もうよしてくれ、僕を惑わせるのは」

「マツテオ、落ち着いて下さい」

「僕をそうさせているのは君だろう、それで何故そんなことが言えるんだ」

その声は次第に荒く大きくなってきた。やがてホテル全体に響き渡るのではないか、と思える程になった。

「言っても何も私は真実を申し上げているだけです」

「では真実は幾つもあるのか。そんな話は聞いたことがない
マツテオはさらに言った。

「真実は一つしかないんだ、じゃあ君は嘘を言っていることになる。
そして僕を惑わしているんだ」

「マツテオ、それ以上言うと」

流石にアラベラも怒りを露にしはじめた。目を顰めさせる。

「じゃあ本当のことを言うんだ」

「何度お話してもわかって頂けないようですが」

二人はホテルの前の廊下で言い合う。そこで誰かがホテルの扉を

開けた。

「どうぞ」

「うん」

「娘は」

まずはアデライーデが入って来た。そしてコートをそのままにホテルの中を見回す。そこで言い争う娘とマツテオが目に入った。

「いたわ！」

そしてすぐにアラベラの下に駆け寄った。

「アラベラ！」

「御母様」

彼女は母の声を聞いて我に返った。そして冷静さをすぐに取り戻した。

「どうしたのです、こんなところで」

「申し訳ありません」

彼女は恐縮してそう答えた。

「少し事情がありました」

「事情！？それは何です」

「はい」

アラベラは母に説明しようとした。そこで他の者も入って来た。ヴェルトナーがいた。そして彼の友人達も。他にも何人かいる。最後にはマンドリーカが入って来た。彼は廊下の部屋の前を見上げて顔を歪ませた。

「やはり」

彼はここであの時の話を思い出した。

「間違いない、あの男だ。私の予想は当たったようだな」

そしてヴェルトナーに顔を向けた。

「伯爵」

「何だね」

事情がわからず首を傾げている彼に声をかけた。

「申し訳ありませんがこれで帰らせて頂きます」

「何っ!？」

彼はそれを聞いて思わず声をあげた。

「それはどうということだ」

「あれです」

彼は答えずにアラベラとマツテオを手で指し示した。そして自分の従者に対して言った。

「すぐに荷造りだ。明日の朝の一番の列車で帰るぞ」

「おい、何を言っているんだ」

ヴェルトナーは慌てて彼を引き留めようとする。

「少し待ってくれ。まだ何もわかっていないじゃないか」

「私にはもう全てわかっております」

彼はそれに対してすぐに言葉を返した。

「ですから立ち去らせて頂くのです」

「だから待ってくれというのだ」

ヴェルトナーはそれでも必死に彼を引き留めた。そしてアラベラに顔を向けた。

「アラベラ」

「はい」

彼女は父に顔を向けた。

「御前に事情を聞きたい。いいな」

「はい」

彼女はそれを受けて頷いた。

「まずマツテオ君のことだが」

「はい」

「一体何がどうしたのか説明してくれないか」

「わかりました」

彼女は父に答えた。

「私はつい先程ここに戻ってきたばかりです。そしてマツテオに」
の前で御会いしたのです」

「その言葉、偽りはないな？」

「全ては御父様が最もよく御存知の筈です」

「よし」

彼はそれを聞き安心した顔になった。そしてマンドリーカに顔を向けた。

「娘の言葉に偽りはありません。これでわかりでしょう」

だがマンドリーカの顔は晴れてはいない。それでも彼は言葉を続けた。

第三幕その二

「神に誓って言いましょう、娘は嘘は言わない、そして会場には間違いなくいた。疑うことはありません」

「信じられるというのですか!？」

「無論」

彼はマンドリーカに対して力強い声を返した。

「アラベラは誇り高い娘です。そして人の道を知っている。決して嘘なぞ言ったりはしません」

「嘘だ」

「嘘ではありません。それは私が保障しましょう。これは単なる空騒ぎ、よくあることです」

そして友人達に振り向いた。

「ではゲームの続きをしましょうか。確か私の一人勝ちの状況でしたな」

「ええ」

友人達はそれに答えた。

「ならばこのまま勝ち続けたいですなにこりと笑ってそう言った。

「それはなりませんぞ」

「そうそう、我々にも勝たせてもらわないと」

彼等はそう言葉を返した。そして彼等はヴェルトナーと共に場所を移ろうとする。だがマンドリーカがそれを許さなかった。

「フロイライン」

彼はアラベラを見上げた。そして呼んだ。

「貴女は私に滑稽な道化の役を演じさせようと考えておられる。だが私はそれをお断りさせて頂きます」

「まだその様なことを」

アデライーデはそれを聞いて嘆きの声をあげた。ヴェルトナーも

身体を戻した。

「まだ信じようとなされないのか」

「これで信じられると思っっているのですか」

マンドリーカは不快感を露わにしてそう言い返した。

「侮辱されて我慢していられる程私は温厚ではありませんぞ」

「侮辱」

ヴェルトナーがその言葉に血相を変えた。

「アラベラが人を侮辱する様な女だと言いたいのか」

「少なくとも私にはそう思えます」

彼はそう返した。

「それ以外にどう考えられるのですか」

「まだ言うか」

ヴェルトナーは次第に怒りを露わにしてきた。

「一体何を仰っているのですか!？」

アラベラは上からマンドリーカに対して声を送った。

「私が人を侮辱するなんて。幾ら何でも」

「ではどう言いましたようか」

彼はもう遠慮しなかった。あからさまに怒りを見せている。

「これ以上はない屈辱を受けているというのに」

「屈辱だなんて」

彼女はそれを聞いて一瞬顔色を失った。

「私が何時貴方に屈辱を与えたというのですか」

「誤魔化すのもいい加減にしてもらいたい、私にだって耳や目はあ

ります」

「それはわかっております」

「そしてそれは決して悪くはありません。だからこそ見えますし聞

こえるのです」

「それで娘を侮辱していいというものではないぞ」

ヴェルトナーが入ってきた。

「待って下さい」

ここでマツテオも降りてきた。

「これは私の問題です。私が解決しましょう」

「君が!? 馬鹿を言え」

ヴェルトナーはそれに対して軽くあしらうようにして言った。

「君が一体何をするといいのだ。何も関係ないというのに」

「関係はあります」

「ではそれは何だね!？」

「それは……」

それを言おうとしたところでマンドリーカが言った。

「君が言うのか」

「ええ」

彼はマンドリーカに対して頷いた。

「よし、ならばいい」

マンドリーカは了承したように頷くとアラベラに顔を向けた。

「よろしいですか」

「何をですか!？」

「彼が何を言うか。それを認めて下さいますね」

「勿論です」

アラベラには隠すことなぞなかった。拒む理由もない。彼女はそれを了承した。

「よろしい」

だがマンドリーカはそれを彼女が観念したと思った。

「これでよし。覚悟されたようですね」

ここでホテルの他の客達が姿を現わした。そしてガヤガヤと騒ぎを取り囲んだ。

「何があったのだ?」

「伯爵の娘さんが何かされたようだ」

そして遠巻きに騒ぎを見だした。ヴェルトナーはそれを見てさらに不快な顔になった。

「マンドリーカ君」

彼はマンドリーカに声をかけた。

「私は確かに破産寸前にまでなつた情ない男だ。だが軍人として、そして父親としての誇りは持っているつもりだ」

「はい」

マンドリーカも彼に顔を向けた。

「娘を侮辱されて黙っていられる人間ではない。これだけ言えばわかるだろう」

「勿論です」

「ならば話が早い。では拳銃を用意してくれ。私は既に持っている。彼もかつては軍人であった。拳銃は持っている。」

「表に出たまえ。そして決着をつけよう」

「望むところです。しかし私は」

彼はマツテオに顔を向けた。

「彼ともけじめをつけなければならぬようですが」

「喜んで」

マツテオもそれに返した。

「僕……いえ私も将校としての誇りがあります。この事態の責任をとらせて頂きます」

「よし」

マンドリーカはそれを聞いて頷いた。

「では行こう。そして全てを終わらせるのだ」

アラベラはそれを黙って見ていた。蒼白となりながらも気丈な顔を崩してはいない。

「私を信じて下さらないのなら」

潔白であることは彼女自身が最もよくわかっている。だからこそ言える言葉であった。

「これからの生活も送ることはできないわ。これで壊れるのなら彼女は言葉を続けた。

「それで終わりだわ。所詮それまでだったというだけのこと」

既に修道院に入る覚悟もできていた。娘時代に別れを告げたのは

覚悟を決めた背景もあつた。

全てを観念しようとしていた。これで壊れるのならそれまでであつた。

「私はあの人を最後まで信頼して愛する。そしてあの方は私も口で言うのは本当に簡単だけれど実行するのは難しいのね」

そうであつた。彼女はそれはわかっているつもりであつたがいざとなるとここまで難しいものだとは思わなかつた。

「フロイライン」

マンドリーカはここで振り返つてアラベラに声をかけた。

「これでもまだ嘘をつかれるのですか」

「何度も申し上げた通りです」

アラベラは毅然として言い返した。

「私は嘘は申してはいませんと」

「そうか、ならない。わかつた」

マンドリーカはここで従者に言った。

「お医者さんをお呼びください。夜遅くて悪いがな」

「はい」

それが決闘の後の手当ての為であるのは言うまでもない。

「では証人は」

「そうだな」

彼はそこで暫し考えた。

「伯爵、貴方の御友人の方々でよろしいでしょうか」

「ふむ」

ヴェルトナーはここで友人達に顔を向けた。

第三幕その三

「私共でよければ」

彼等はそれを了承した。これで全ては決まった。

だがここで思わぬ乱入者が出て来た。

「お父さん、待って！」

「その声は！」

ヴェルトナーとアラベラは声がした方に顔を向けた。アデライー

デモである。

それはホテルのアラベラ達の部屋の前であつた。そこに彼女がいた。

「ズデンカ」

彼等は思わず彼女の名を呼んだ。ズデンカは女性の部屋着を着ていた。

「ズデンカ!？」

マッテオはその名を聞いて眉を顰めた。

「ズデンコじゃないのか!？」

そしてヴェルトナーに顔を向ける。

「伯爵、これはどういうことですか。彼は男ではなかったのですか」
「むむむ」

答えるに答えられない。彼は顔を顰めさせるしかなかった。

「実はな」

だがこうなつては仕方がない。彼は真相を言おうとした。だがそうした悠長な状況ではなかつた。

「誰だあの美しい娘は」

「はじめて見るぞ」

ホテルの者達は彼女を見て口々にそう言う。そして別の話題に移つた。

「伯爵の御令嬢か？」

「アラベラ嬢だけではなかったのか？」

「いや、確か御息がおられた筈だが」

「では彼女は」

アラベラは妹の側に来た。そして優しい声をかけてきた。

「ズデンカ、どうしたの？そんなに取り乱して」

「姉さん」

彼女は姉を見上げた。姉は彼女の顔を見て微笑んでいる。

「話して御覧なさい。落ち着いてね」

「はい」

姉にそう言われ彼女は次第に落ち着きを取り戻してきた。そして

話しはじめた。

「まずはマツテオのことですが」

「僕のことかい？」

彼にはもう何が何だかわからなかった。

「その前に待ってくれ」

彼は逆にズデンカに問うた。

「君は本当にあのズデンコなのかい？女の子だったのか？」

「はい」

彼女はその問いに対して頷いた。

「御家の事情があつて。今まで男の子として育てられたの。それで」

「そうだったのか」

彼はそれを聞いて話の一部を理解した。

「では君の本当の名前はズデンコじゃなかったんだね」

「ええ」

「ズデンカだったんだ」

「そうよ。御免なさい、今まで隠していて」

「いや、いいんだよ」

マツテオはそれを許した。

「君は僕の親友でいてくれた。そのことには心から感謝しているか

ら」

「有り難う」

「けれどももう一つ聞きたいことがあるんだ」

「それは」

「その僕のことだけれど。一体何なんだい」

「ええ」

ズデンカはそれを受けて姿勢を整えた。そして語った。

「今の騒ぎだけれど」

「うん」

「貴方には罪はないわ。罪があるのは私」

「それはどうということだい」

「ズデンカ」

アデライーデがここで娘の話を止めさせようとする。恥をかかせたくはなかったからだ。だが彼女の夫がそれを遮った。

「貴方」

「ここは話させてあげよう。あの娘の為に」

「それは」

反論しようとした。だが夫の顔を見てそれを止めた。父親の顔であるからだ。

「わかりました」

彼女は頷いた。それを受けてヴェルトナーはズデンカに対して言った。

「さあズデンカ、話しなさい。私がいるから」

「お父さん」

「私もよ」

アラベラはやはり側にいた。

「だから安心して。貴女は一人ではないから」

「ええ」

ズデンカは頷いた。そして再び語りはじめた。

「先程部屋の中で貴方に御会いした人は」

マッテオに向けて話す。マッテオは黙ってそれを聞いている。

「私なのです」

「えっ、じゃあ君……いや貴女は」

「そうよ。貴方を騙したのよ。姉さんと偽ってね」

「何故そんなことを」

「それは聞かなくともわかるだろう」

ヴェルトナーがマツテオに対して言った。

「君も男なら。それ以上私に言わせるつもりかね？」

「いえ」

彼はその言葉に首を横に振った。

「わかりました。ようやく全てが」

「そうか。ならばいい」

ヴェルトナーは父の顔でそれに応えた。

「ではズデンカ、御前の責任の取り方はわかっているね」

「はい」

「それならいい。ではマツテオ君」

マツテオにも声を向けた。

「娘の愚かな行為を許してやってくれ。この愚かな父に免じて」

「いえ」

だがマツテオはここで首を横に振った。

「許されるべきは私です。何も知らずにこの様な騒動を起こしてし

まいました」

「それは私が」

「貴女は関係ない」

ズデンカに対して言った。

「私が貴女に気付いていればこんなことにはならなかった。そして

今私は貴女の気持ちに応えたいと心から思っています」

「じゃあ私は貴方の……」

「そうです。これから側についてくれますか」

彼のその顔はもう親友への顔だけではなかった。

「親友として、そして私の生涯の伴侶として」

「はい………」

ズデンカはそれを了承した。こうして二人の輪は出来上がった。

「私達も愚かなことをしていた」

「はい」

ヴェルトナーとアデライーデの夫妻はそれを見て目を伏せていた。

「ズデンカに対してあまりにも酷いことをしてきた。その罪は重い」

「はい、わかっております」

「だがこれからは二人の為に全てを捧げよう。今までの償いの為に」

「そうですね。これからはあの娘の幸せの為に生きましょう」

「うん、そうしよう」

マツテオとズデンカは固く抱き合っていた。そしてそのまま場の端へ向かった。

その場にいた全ての者が二人を祝福した。彼等は今その道を二人で歩きはじめようとしていた。だがその祝福の場で一人後悔の念に苛まれていた者がいた。

「全ては私の早とちりだったのか」

マンドリーカは暗澹たる顔でそう呟いた。

「あの娘がまさか彼だったとは。そしてこのような真相だったとは。知らなかったとはいえ私は何ということをしてしまったのか。彼女に何ということをしてしまったのか」

後悔と自責の念が彼を支配する。だがどうにもならない。そこへ従者が戻って来た。

第三幕その四

「旦那様、拳銃をお持ちしました」

「そうか」

彼はそれを受けて応えた。

「だがそれは私の為だけに必要となってしまったな。お医者様よりも神父様の方が必要なようだな」

「といたしますと」

「すぐにわかる」

彼は溜息混じりにそう答えた。

「すぐにな」

「はあ」

そして彼はアラベラに顔を向けようとする。だがとても顔を向けられない。

「どうしたらいいのだ。彼女は私を許してはくれまい」

彼は今責任の取り方について考えていた。

「彼女の恥を注ぐには私が自らを処断するしかない」

そしてそう結論付けていた。

「それは……拳銃しかないだろう」

心の中でそう考えていた。そこでアラベラがやって来た。

「フロイライン」

アラベラはにこりと微笑んだ。優雅で気品のある笑みであった。

「いや、私はその笑みを向けられるに値しない者です」

彼はそれを振り払おうとした。

「それはこの騒動でよくおわかりの筈です」

「いえ」

だがアラベラはそれを否定した。そして彼の手をとった。

「勿体ない」

だがその手を振り払うことは許されてはいない。

「その様な」

「マンドリーカ伯爵」

彼女はここで彼の名を呼んだ。

「私はこう考えています。永遠の絆はどのような困難にも壊れはしないのだと。私達は永遠の絆を誓いましたね」

「それを壊したのは私です」

「壊れはしませんわ。そしてそうした困難を乗り越えなくて何が絆でしょう。今夜の出来事はそうした困難の一つに過ぎないのです」

「困難の一つに過ぎないのですか」

「はい。ですから私はあえて申し上げます。その絆を結びつけるものは愛と」

言葉が続けた。

「信頼であると」

「信頼」

「はい」

彼女はここでまたにこりと微笑んだ。

「そうです。信頼があれば絆は決して壊れはしません」

「しかし私は貴女の信頼を裏切りました。こともあるうに貴女を疑い侮辱してしまった」

「いえ」

だがアラベラはその言葉に対して首を横に振った。

「私はそうは思っておりませんわ。それよりも」

彼女はここで妹達に顔を向けた。

「あの二人を御覧下さい」

そこには固く抱き合い仲睦まじいマツテオとズデンカがいた。

「今はあの二人も祝って欲しいのですが」

「彼等を」

「はい。私の可愛い妹の幸福を」

その目は温かいものであった。妹を見守る姉の目であった。

ズデンカはこの時両親にも囲まれていた。

「お父さん、お母さん」

「ズデンカ、今まですまなかつたな」

彼等は娘とその恋人を囲んでいた。そしてそれまでのことを謝罪していた。

「いいんです。仕方ないことだったから」

「そう言ってくれるか。優しい娘よ」

「優しいだなんて。お父さんとお母さんは私にいつも優しくしてくれたし」

「恨んではいないのね」

「どうして恨むの。お母さんを。私を育ててくれたのに」

「そう、そう言ってくれるの」

アデライーデはその言葉を聞いて涙を一粒落とした。それは床に落ちてはじけた。

「嬉しいわ。そして神に感謝します」

そしてズデンカを抱き締めた。

「この様な心優しい娘を私の様な愚かな母に授けて下さったことを」

「お母さん……」

ヴェルトナーはマツテオの方に歩み寄った。そして彼に対して言った。

「娘を頼む」

「はい」

マツテオは頷いた。

「私の様な者でよければ。彼女を生涯かけて愛することを誓います」

「頼むぞ。私は幸せ者だ」

ヴェルトナーもそこで涙を落とした。

「二人の素晴らしい娘を持つことができたのだからな。これは自慢になってしまおうが」

「いえ」

マツテオはそこで首を横に振った。

「それは私の言葉です。ズデンカは私にとっては過ぎた人です」

「過ぎた人」

「はい。今までずっと私のことを案じ、愛してくれたのですから
そう言いながらズデンカに顔を向けた。ズデンカも彼を見ていた。
永遠に二人でいよう」

「はい……」

そして二人は再び抱き合った。そして絆が結ばれたのであった。

「これで終わった」

ホテルの客達はそれを見て安心したように微笑んだ。

「では眠ろう。輝かしい明日の為に」

「ああ」

彼等はそれぞれの部屋に帰っていく。ヴェルトナーは友人達に対して言った。

「どうやら全てが終わったようです。これからどう致しますか」

「それは決まっております」

彼等の中の一人がそう言った。

「幸福は祝福される為のもの。違いますかな」

「確かに」

彼はそれを受けて微笑んだ。

「では行きますか」

「はい。貴方達の娘さん達の祝福を乾杯する為に。朝まで付き合い
ますぞ」

「それは有り難い」

彼はそれを受けて喜びの声をあげた。そして妻に顔を向けた。

「では行って来るよ」

「はい」

彼女はそれを笑顔で送った。

「私は部屋に戻りましょう。そしてズデンカを祝福してあげましょ
う」

「そうしてくれるか。では私はマッテオ君を誘おう」

「私をですか」

「そつだ。婿を祝うのは舅の務めだからな」
彼はそう言つて微笑んだ。

「有り難うございます」

「では来た前。そして今宵は飲み明かそうぞ」

「はい」

マツテオはそれに従いヴェルトナーの後に従つた。そしてそのままホテルを後にした。

「では明日からはじまる幸福の為に」

アデライーデはズデンカの手を取つた。

「私達は帰りましょう。そして二人でささやかな祝福を」

「お母さん」

ズデンカは母に従つた。そして二人は自分達の部屋に帰つて行つた。

残つたのはアラベラとマンドリーカだけになった。二人は一言も発さず向かい合つていた。そこにあの従者が戻つて来た。

「旦那様」

彼はマンドリーカに声をかけた。

「拳銃の用意ができましたが。あとお医者様も」

「そうか」

マンドリーカはそれを聞いて頷いた。

「では行くか」

「はい」

彼はホテルを出ようとする。アラベラはそれを呼び止めた。

「待つて下さい」

「いえ」

彼はそれに対して首を横に振つた。

「私なぞは貴女には」

「私のお願ひでも聞いて頂けませんか？」

アラベラはそこでこう言つた。

第三幕その五

「私のお願いでも」

「それは」

マンドリーカはその言葉に振り向いた。

「ここで暫く待っていて下さいますか」

「宜しいのですか？」

「はい」

アラベラは微笑んで答えた。

「そしてそちらの従者の方にお願ひしたいのですが」

「私にですか」

「ええ。お医者様にはお帰り頂いてそして拳銃を収めて下さい」

「わかりました」

「それから」

アラベラはなおも話を続けた。

「何でしょうか」

「はい」

アラベラは静かに答えた。

「お水を持って来て下さい。コップに一杯のお水を」

「それで宜しいのですか」

「はい、今の私にはそれが必要です」

「わかりました」

彼はそれに従いその場から立ち去った。その際マンドリーカが彼に声をかけた。

「これを」

懐から財布を取り出しそこから札を何枚か取り出した。

「お医者様に。謝罪として」

「わかりました」

アラベラはその間に自分の部屋に戻った。マンドリーカに顔を向

けることなく挨拶もなかった。

「当然だな」

マンドリーカはそれに対してうなだれてそう呟いた。

「私の様な愚かな男には。そうされて当然なのだから」

彼にはそれが痛い程よくわかっていた。少なくともそう自責していた。

だからこそ階段の上にある部屋から目を離すことができなかった。そこにいる女性は自分を決して許しはしないだろうと考えていた。

「全ては終わった。私は残りの人生を後悔と自責の中で生きていかなくはならない」

扉は開かない。開く筈がないと思っている。

やがて従者が戻って来た。彼はその手にコップに入った水を持っている。

「来たか」

「はい」

従者は主に答えた。

「ではその水を上を持って行きなさい。あの人にね」

「わかりました」

この時二人はそのコップの水が何を意味するのかわかってはいなかった。ほんの少し落ち着いて考えればわかったかも知れない。だが今の彼等はそれを考えるにはあまりにも多くのことがあり過ぎた。従者は階段を上がる。そして部屋の扉の前に来るとその扉をノックした。

扉が開く。その中にいるであろう彼女は見えない。

「見えないのは私の恥ずべき行いのせいか」

マンドリーカはそれを見てそう思った。

従者が下がる。そしてマンドリーカの側にやって来た。

「御苦労」

「はい」

彼は主に頭を下げた。

「今日は色々世話かけた。これを」

彼はまた財布を取り出しそこから札を一枚彼に手渡した。

「それで美味しいものでも食べなさい」

「有り難うございます」

彼は従者達に対しても決して吝嗇ではなかった。むしろ気前のいい男であった。

「では今日はこれで休んでいいよ」

「はい」

従者は頭を下げその場を後にした。こうしてマンドリーカだけがそこに残った。

彼は階段の前に来た。そしてそこから部屋のある上の階を見上げている。

「彼女は来ない」

彼はまだそう思っていた。

「それはわかってる。だがここを立ち去るわけにはいかない」

それが最低限の責任の取り方だと思っていた。少なくともこの場では。

扉が開いた。そしてそこからアラベラが姿を現わした。その手にはあの水がある。

「あれは」

マンドリーカはその水に目がいった。

「どうするつもりなのだ」

その時先に彼女に話した婚礼の際の清らかな水のことを思い出した。だがそれが自分に向けられるとは思ってはいなかった。

扉を閉め前を進む。マンドリーカはそんな彼女から目を離さない。そしてゆっくりと階段を降りてくる。ホテルの灯りの中に照らされながらゆっくりと降りてくる。

遂に彼の前に降り立った。そしてそのコップの中の水を差し出した。

「どつぞ」

彼女は微笑んでその水を差し出した。

「私にかい？」

マンドリーカは受け取る前にそう問わざるを得なかった。

「勿論です」

アラベラは微笑んでそう答えた。

「貴方以外に誰がいるのでしょうか」

「しかし私は」

受け取ることが出来ない、そう言おうとした。だがアラベラはそれを許さなかった。

「女性からの申し出を断るのはどうかと思いますよ」

「ですが」

それでも彼は躊躇った。だがアラベラはそんな彼に対して静かに語りはじめた。

「この水を受け取った時私は考えたのです。飲み干してしまおうかと」

落ち着いた気品のある声であった。

「ですがそう考えた時貴方のことが思い浮かんだのです。それで今宵のことは全て清められたのです」

「清められたのですか」

「ええ。この水によつて」

彼女はここでその水を彼に見せた。

「この水に私は貴方の顔を見ました。それで私は決めたのです。この水に従おうと」

「そしてここまで来られたのですか」

「はい」

彼女は答えた。

「そしてその清らかな水を私の生涯の伴侶となる貴方に差し上げよう決めたのです。娘時代の終わる最後のこの夜に」

そして再びその水をマンドリーカに差し出した。

「わかりました」

彼はようやくそのコップを受け取った。そしてそれを手にして彼女に対して言った。

「その続きは申し上げていませんでしたね」

「続きとは」

「ええ。まずは私がそのコップの半分を飲みます」

彼はそこでそのコップの水を実際に半分程飲んだ。

「そして」

次にそのコップをアラベラに差し出した。

「次には貴女が飲まれるのです」

「この清らかな水をですね」

「そうですね、そしてそれが私達を清め永遠に結びつけるのです。祝

福の水として」

「わかりました」

アラベラはそれを受けてその水を手にした。そしてその水を全て飲み干した。

「これでいい」

マンドリーカはそれを見て満足した様に微笑んだ。

「これで私達はようやく結ばれたのです」

「清められ、そして祝福されて」

「はい。神が私達を祝福して下さいました。私達は永遠に一緒です」

「この世の終わりまで」

「そう、最後の審判まで」

アラベラはコップを足下に置いた。そして両手を差し出した。

マンドリーカはその両手を握り締めた。力強く、それでいて温かい手であった。

「私はもう貴方以外の誰のものでもありません」

「それは私も同じこと」

「信じて下さいますね」

「はい」

マンドリーカは頷いた。そして彼も言った。

「私を信じて下さいますね」

「はい」

アラベラも頷いた。それで二人の絆が確認された。

「私はもう別のものになることはありません」

「それは私も」

アラベラもマンドリーカもそれは同じであった。

「明日から二人の生活がはじまります」

「はい」

「この懐かしい都を後にして私は貴方の側へ」

「そして私はそれを受け止める。行きましよう、緑の都が私達を待っています」

「ええ。行きましよう、二人で」

「喜んで」

二人は並んで階段を昇っていく。そしてそのまま二人の世界に向かうのであった。

アラベラ 完

2004・12・6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3512f/>

アラベラ

2011年4月28日00時36分発行